

推 進 地 域 ・ 推 進 校

【小学校・ビオトープに関わる体験活動】

自ら学び、生き生きと活動できる子どもの育成

福島県鮫川村立鮫川小学校

学校の概要

- ① 学校規模
 - 学級数：12学級(内特殊学級1学級)
 - 児童数：253人
 - 教職員数：19人
 - 活動の対象学年：全学年・253人
- ② 体験活動の観点などからみた学校環境
 - 本村は、福島県の南部に位置し、人口は4千5百余人である。主産業は農林業で、面積の約8割ほどが森林原野で自然豊かである。地形は丘陵原野型で起伏が多く、耕地は山麓の斜面と山あいにある。
 - 本校は、鮫川村のほぼ中心に位置し、役場、公民館、図書館などの公共施設、商店等が集中している地区にある。
 - 最近村では、休耕田を利用した豆の栽培、さらに小学校統合による廃校の有効活用する地域再生策を打ち出した。また各地区毎に子どもの教育を考える懇談会を開催するなど、地域ぐるみで地域活性化をめざす気運が高まりつつある。
- ③ 連絡先
 - 〒963-8401
福島県東白川郡鮫川村大字赤坂中野
字道少田86番地
 - 電話：0247-49-2005
 - FAX：0247-49-2017
 - 電子メール：samega-e@smile.ocn.ne.jp

体験活動の概要

- ① 活動のねらい
 - 各教科、総合的な学習の時間等との関連を図りながら、様々な体験活動を取り入れ、自ら学び、生き生きと活動できる児童を育成する。
 - 郷土の豊かな自然や風土、先人の築いた歴史や文化を学んだりするなど幅広い体験活動の展開をとおして、郷土を知り、見直し、愛する心を育て、さらには将来に夢を持ち自分たちの郷土を誇りに思う児童を育成する。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け(単位時間数)
 - 自然大好き(ビオトープ)
(1・2年：創意活動10単位時間、3～6年：総合的な学習の時間10単位時間)
 - さめっ子タイム(課題追求活動)
(1・2年：生活科10単位時間、3～6年：総合的な学習の時間10単位時間)
 - 農業体験・収穫祭
(1・2年：生活科13単位時間、3～6年：総合的な学習の時間13単位時間)
 - ボランティア活動
(1・2年：創意活動2単位時間、3～6年：総合的な学習の時間2単位時間)

1 活動に関する学校の全体計画

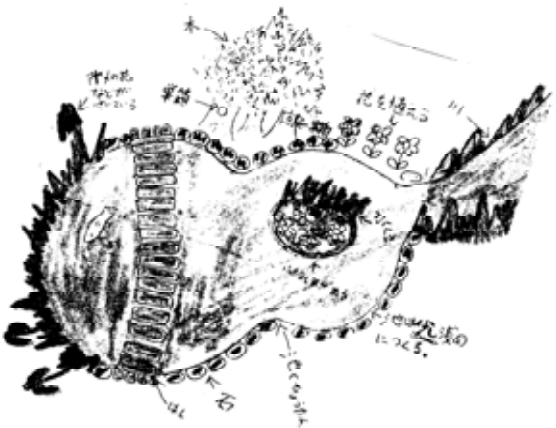
(1) 活動のねらい

- ① 自分達の手で休耕田に池や川をすることで、自然に興味・関心を持たせ、鮫川村の自然にも目を向け、郷土愛を育むことができるようにする。
- ② 身近な場所に水辺をつくることで、理科や生活科の授業、クラブ活動の教材など学校教育全体に生かすことができるようにする。

③ ビオトープづくりの計画・作成・活動を通して、自主的な活動や体験の仕方、同学年・異学年間の協力の仕方、地域の方々との関わり方を身に付けることができるようにする。

(2) 全体の指導計画

豊かな体験活動には、さめっ子タイムや農業体験、ボランティア活動などいろいろあるが、ここでは、自然大好き（ビオトープ）に関する内容の計画について記す。

学 年	単位時間数	活動内容	教 科 等 と の 関 連		
全学年	2	学校周辺探検	1年	国語	たんけんしたよ、みつけたよ
				生活	いきものだいすき
			2年	生活	生き物とともだち
			3年	理科	こん虫をしらべよう
			4年	理科	あたたかくなると
			6年	理科	地球と生き物のくらし
全学年	1	生き物誘致計画	 <p style="text-align: center;">〔児童が考えた設計図〕</p>		
全学年	1	設計図作成			
下学年	4	建設地除草			
上学年	4	ビオトープ建設			
全学年	2	ビオトープ観察	4年	理科	暑くなると、すずしくなると、寒くなると
			5年	国語	地球環境について考えよう
				理科	流れる水のはたらき

2 活動の実際

(1) 事前指導

環境委員会の児童に、野生生物の生存する空間を示す「ビオトープ」という言葉を教えた。そして、トンボやホタル、メダカなどを身近な場所「学校」で観察している様子を想像させた。また、ビオトープ建設方法をVTRで見せてイメージさせた。そうすることで、児童主体でのビオトープ作成を図った。

(2) 活動の展開

○ 毎週月曜日の児童会活動の際、環境委員会の児童が今後のビオトープの方向性について話し合い、全校生にアンケートを取ったり、各学年に活動内容などを提案したりしている。

日程	環境委員会の取り組み	全校生の取り組み
5月上旬	学校周辺探検を呼びかけた。	学校周辺を探検し、動植物の観察を行った。
5月下旬	どんな生き物を呼ぶかのアンケートをとった。	魚、トンボ（ヤゴ）、蛙など水棲生物を呼びたいと考えた。

6月中旬	どのようなビオトープを作るか呼びかけた。	各学級から設計図をだしてもらい、アンケートの結果、次のような形のものに、決定した。 ・4×10＝40平方メートル ・ひょうたん型
8月下旬	ビオトープの枠組への杭打ちを行った。	杭を打ちやすくするために、下学年によりビオトープ現場の除草を行った。
9月上旬	ビオトープづくり（池・川づくり）を呼びかけた。	上学年が中心になり、学校上の休耕田の穴掘りを行った。 6年以上前から休耕田だったため根がはっており、鍬やスコップなどで穴を掘るのに児童は苦勞をしていた。男子は鍬を地面に刺し丈夫な根を切った。女子は根が切れて掘りやすくなった地面の穴を掘った。男女が役割分担し協力して作業を行った。
10月中旬	 〔棲息していたイモリ〕	地域の方々と観察会を行った。 池や川には、何も放流しなかったが、ガムシ・水カマキリ・マツモムシ・イモリの存在が確認された。また、今まで見られなかったシオカラトンボが飛んでいるのが見られたので、多分ヤゴもいると思われる。
10月中旬	ビオトープの名前を決めるためにアンケート調査を行った。	「ひょうたん島」「うきうきランド」などの意見があったが、「SAMEGAWAワールド」に決定した。
10月下旬	SAMEGAWAワールドの決まりを作るためのアンケート調査を行った。	大切に活用するために、次のように決まった。 「生き物を大切にする」「木道以外のところを歩かない」「池にゴミを入れない」「池には作業以外入らない」
11月上旬	みんなで考えた決まりを受けて、木道設置の設計図づくりを呼びかけた。	池や川の観察がしやすく、ビオトープを壊さないようにできるもの考えた。
12月予定	木道建設	
1月以降	ビオトープへの意識を高めるためのクイズを考える。	
年間	ビオトープ観察日誌(生物観察など)の記入をする。	

〔ビオトープづくりをしている6年生〕

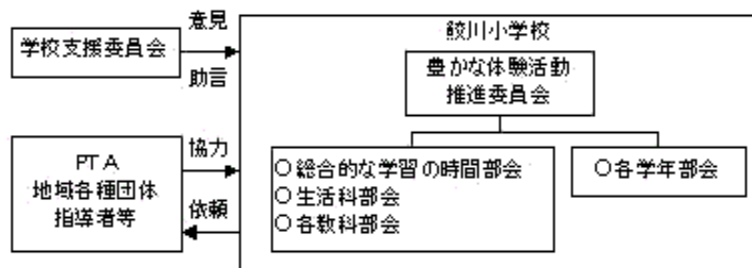
(3) 事後指導

次年度の各学年の学習指導に活用していきたい。そのためにも、自然環境の大切さやビオトープや自然を守る必要性について指導したい。特に、水の大切さや池と川をきれいな状態に管理する方法を学ばせたい。

3 体験活動の実施体制

○ 学校及び学校支援委員会の体制

体験活動を推進するにあたり、活動に関係する地域の各団体の代表による学校支援委員会を設置して委員から活動についての意見・助言をいただきながら校内の推進委員会を中心に実践化を図るようにした。



○ 配慮事項

- ・ 児童主導で行うことができるように、子どもの考えを引き出したり、子どもと同じ目線で指導を展開し、児童に成就感を味わわせるようにした。
- ・ 休耕田に入っただけの作業だったので、必ず長靴を履くことを徹底した。
- ・ 鍬やスコップなどを使用したので、周りを確認して使ったり、足に刺したりしないように注意を促した。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

各学年ごとに、児童たちが活動した後に、絵や文章などで反省をした。それらから、児童たちがビオトープづくりに意欲的に取り組んだ様子や生物観察を楽しんで行い、自然に興味を示し始めたことがうかがえた。今後はさらに、自分達で「休み時間にも、ビオトープで生物を観察したい。」という児童が増えるような工夫をしていきたい。

5 活動の成果と課題

(1) 成果

自然環境についての知識が増え、各教科での学習にも生かせるようになってきた。また、自然で遊ぶ楽しさを覚え、休み時間にもビオトープに足を運ぶ児童が見られるようになってきた。休日に家族で川に行ったり、友達と近くの自然を探検したという話が聞かれるようになった。

ビオトープづくりの計画・作成・活動を通して、自主的に活動したり、友達同士で協力したりする態度を身に付けることができた。

(2) 課題

池に観察用の橋を設置したり、呼びたい生き物のために必要な植物を植えたりしたい。また、ビオトープをよい状態に保つための管理方法を教師が学び、児童に指導していきたい。そのためにも、外部指導者に協力していただき、打合せや活動を行っていきたい。

次年度の教育課程には、各学年でできるビオトープの活用法の位置づけをしたい。その際に、ビオトープや自然に興味を持たせるための楽しい活動も盛り込んでいきたい。

【小学校・勤労生産、文化や芸術が複合した体験活動】

—豊かに表現する力をはぐくむ体験活動—

はいばらぐんさがらちよう さがらちようりつはぎま
 静岡県榛原郡相良町推進地域協議会・相良町立萩間小学校

学校の概要

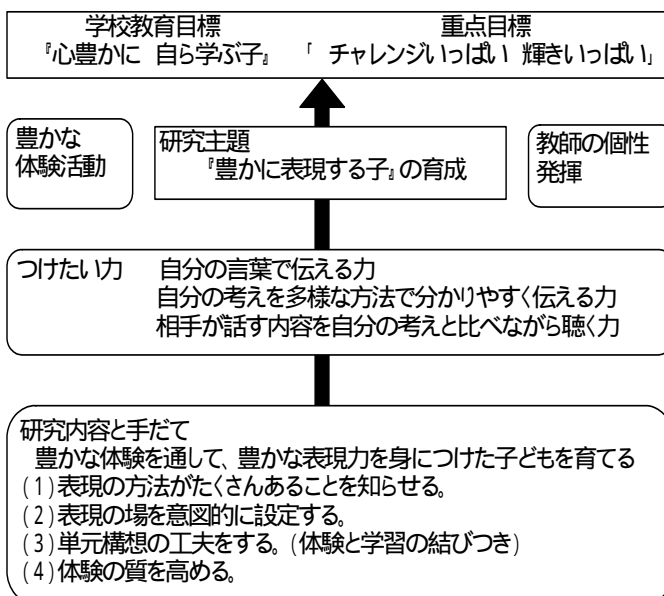
- ① 学校規模
 - 学級数：7学級（内養護学級1学級）
 - 児童数：170人
 - 教職員数：13人
 - 活動の対象学年：全学年
- ② 体験活動の視点から見た学校環境
 - 豊かな自然に囲まれた地域である。お茶を主要産業としているが、最近ではほとんどが兼業農家となっている。
 - 地域の人々の温かさにも恵まれ、学校の教育活動が支えられている。
- ③ 連絡先
 - 〒421-0504
静岡県榛原郡相良町黒子75
 - 電話：0548-54-0020
 - FAX：0548-54-1730
 - <http://www.wbs.ne.jp/cmt/hagisyo>
 - E-mail:hagisyo@mail.wbs.ne.jp

体験活動の概要

- ① 活動のねらい
 - 地域の自然や人のよさを感じ、地域を愛する心をはぐくむ。
 - 学ぶ意欲を高め、理解を深め、豊かに表現する力を育てる。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け
 - 各学年の計画による生活科、総合的な学習の時間の中での実施を基本とする。
 - 勤労生産活動
 - ・ 田植え、稲刈り
 - ・ おはぎ作り、餅つき
 （総合的な学習の時間20時間、道徳の時間1時間、特別活動2時間、家庭科5時間）
 - 文化、芸術活動
 - 「蛭ヶ谷の田遊び」の上演
 （総合的な学習の時間15時間、特別活動2時間）

1 活動に関する学校の全体計画

○校内研修とのかかわり



○各学年の体験活動計画

学年	活動のテーマと主な活動内容
すこやか	<やってみよう なかよくなるう> 学校内外の人たちとの交流
1年	<なかよくなるう> 自然に親しむ活動、遊びの広がり・人とのかかわり
2年	<萩間博士になるう> 萩間探検、四季を楽しむ活動
3年	<萩間のじまんPR大作戦> 萩間の自慢調べ、萩間のお茶でお菓子作り
4年	<いろいろな人とふれ合おう> 福祉体験、施設訪問
5年	<米作りを体験しよう> 稲作に関する活動や観察、食べて楽しむ、伝統文化
6年	<日本の文化に親しもう> 外国のことを調べる、日本の食文化に親しむ



1年：おもちゃランド



2年：萩間探検



3年：お茶工場見学



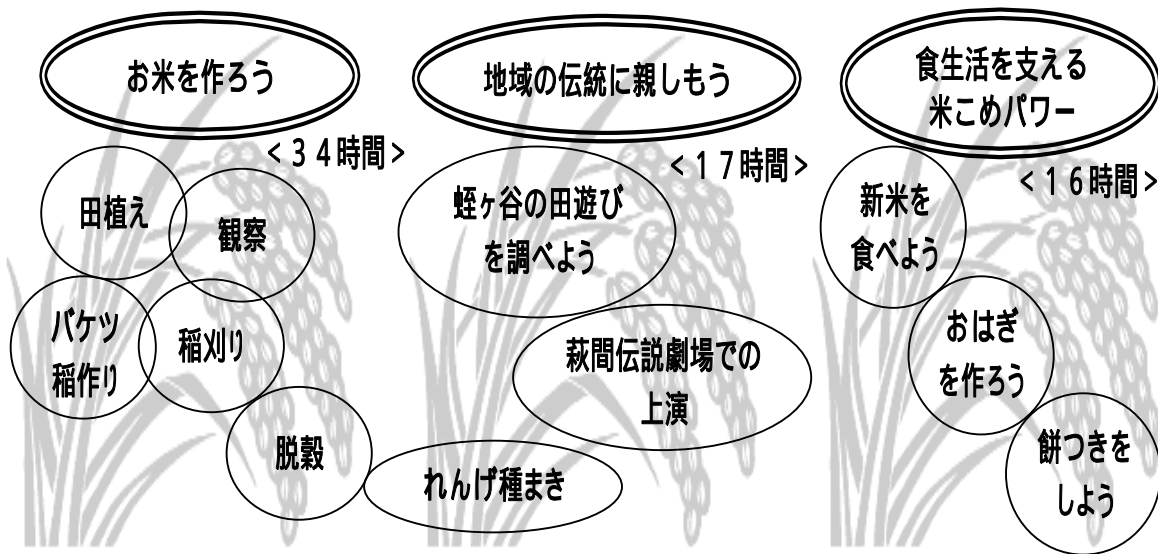
4年：福祉体験



6年：塩作り

○全体指導計画「総合的な学習の時間」（5年生：米作り）

<活動のねらい>米づくりを通して、日本の農業に関心を持つと同時に、この体験活動を支えてくれる人たちとの交流を楽しんだり、伝統文化に親しんだりする。



*各体験活動を、社会科・家庭科・学級会活動及び道徳の時間と関連させて実施する。

2 活動の実際～5年生の米づくり体験～

<体験によって深まる学び>

① 田植え体験～失敗から学んだものは

「きゃあ、気持ち悪いよ。」裸足で田に入ることそれ自体が貴重な体験となっている子どもたちは、講師のおばあさんから苗の植え方を教わり、教師手作りの尺ロープに沿って整然と苗を植えていく。田植えの苦勞も楽しみに変えてしまうほどの活発な活動だった。ところが、友達に渡そうと思って投げた苗が隣の田に入った。すると、そこで作業をしていたおばさんが、その苗を拾ってくださった。担任は「隣のおばさんは周りのことも考えて作業している。」と厳しい姿勢で伝え、自分たちの取組を反省させた。子どもたちは、心を込めて世話をしていくことを確認し合い、お詫びの手紙を書き上げた。失敗が貴重な学びの場となった出来事であった。



② 日常の観察を続けて～事実への驚き～



休み時間を利用して観察記録をつけることになった。休日に友達と連れ立って田の様子を見に来る子もいる。そうした中、N君が黄色い斑点のついた葉を見つけ、「葉イモチ病にかかっている。」と社会科の学習で調べた病気の写真を広げながら訴えた。「本当だ。」社会科で学習している稲の病気が、実際に自分たちの田で発生しているという事実への子どもたちの驚きは大きかった。学んで得た知識と体験がつながった瞬間だった。

子どもたちの観察の仕方が変わってきた。自分たちで決めた観点だけを観察していた児童の取組が、より具体的な追求に変化してきたのだ。稲が実をつけ始めたころ、その中身が白い液状だった。これを発見したM子は、「これがお米になるのかなあ。」と疑問を持ち、数日後、同じように調べてみた。すると、今度は個体の状態（米）になっていた。「やっぱりそうだ。」M子は、体験を通して納得していった。

③ 「農薬をまくか?!」～体験としなやかな主体性

「これが稲の穂だよ。」学校支援委員のOさんに生育状況を説明していただき、柔らかな穂を間近に見た子どもたちは、「これがこれからお米になるんだ。」と収穫への期待に胸を膨らませた。しかし、田から出た際に互いの足を見てびっくり。ズボンに虫がべったりと付着していたのだ。「イネアオムシ」、これは、稲の葉を食い荒らす害虫だったのである。よく見ると、もち米の稲の葉が虫食いだらけである。衝撃的なこの体験は、「無農薬で育てよう。」と決めていた子どもたちの心を大きく揺らした。



翌日の総合的な学習の時間は、「農薬をまいて、蛙も一緒に死んだら困る。」という発言がきっかけとなり、自分の思いを互いに出し合う話し合いとなった。「虫にも命があるけど、このままではお米がとれなくなりそうだから、農薬をまきたい。」「自分たちがせっかく育てた稲だから守りたい。」という発言が相次いだ。昨日の衝撃的な体験、稲の生長を見守る温かな心情から、「無農薬がいい。」と主張する子どもが一人もいなくなったのも理解できた。しかし、Oさんの「害虫という虫はいないよ。」という言葉が子どもたちの心に引っかかり、簡単に「農薬をまこう。」という結論にはならなかった。苦肉の策として「蛙を逃がしてから農薬をまこう。」という意見が出され、「蛙救出作戦」を実行することになった。農薬を使うことを自らの問題として受け止め、主体的に解決しようとする子どもたちの姿が見られた。その後、かかしや鳥おどしを使っての害鳥対策も実行し、稲に何事か起きたらすぐに学校に集まることを約束して、夏休みを迎えた。

④ 稲刈り～先人の知恵～

意気揚々と田んぼに向かった子どもたちであったが、すぐに稲刈りに取りかかるということではなかった。刈った稲を束ねるための“すがい”を作る作業があった。藁を編んで作るのは簡単ではなかったが、自然のものを無



駄なく利用するという知恵に感心していた。また、刈った稲を“はぎ”に掛けるために、交差させて束ねることも教わった。初めて使う鎌に四苦八苦しながらも、稲刈りは無事に終わった。作業後の作文には、自分の父母が、かつてすがい作りを手伝ったことを聞いたり、今まで家の米作りに無関心であったことを反省したりした様子が書かれていた。

＜地域や家庭に広がる学び＞

⑤ 蛭ヶ谷の田遊び

学芸的行事である萩間伝説劇場の演目を決定するにあたり、今年のテーマを“米作り”と決めた。地域に伝わる米に関するお話や行事を調べる活動を通して、収穫祈願のための“蛭ヶ谷の田遊び”という芸能に決定した。詳しいことを調べるために、学校にあったビデオを視聴することから活動を始めることになったが、昔の言葉や独特の言い回しは子どもたちだけで理解するには難しすぎた。そこで、実際に田遊びにかかわっている



地域の方を講師に招き、田遊びの意味や成り立ちを話していただいた。さらに、地域の方に尋ねたり、実際に演じてみたりしながら、田遊びについての理解を深めていくことになった。田遊びの内容をできるだけ忠実に再現しつつ、見ている人にも分かりやすいアレンジを加えてシナリオ作りを進めた。その過程で子どもたちは、せりふだけでなく、行事そのものの意味まで理解するようになった。

“蛭ヶ谷の田遊び”は自分たちの米づくりと深くかかわっていることに気付いていった。

萩間伝説劇場で上演した「萩小風蛭ヶ谷の田遊び」は、地域の方たちにも好評で、子どもたちの自信につながった。

⑥ 食生活を支える米こめパワー

おいしいご飯の炊き方を覚えたり、米のいろいろな食べ方を調べたりしながら、日本の食文化にふれ、親しむ活動を行った。玄米と白米の味の違いを感じたり、米が形を変えて私たちの生活を支えていることを実感したりできた。もち米を使ったおはぎ作りでは、地域の方たちに協力していただき、おいしく楽しんで食べることができた。蒸したもち米のねっとりとした感触や煎りたての大豆を石臼で挽いたきな粉の香ばしい香りなどを楽しみながらの活動となった。この活動を通して、今度は家族と一緒に作りたいという思いを強くした子どもも多かった。



最後は、餅つきで締めくくりをした。杵で餅をついたり手返しをしたり、自分たちの力でやり遂げ、ペアの3年生と一緒においしいお餅をほおばった。最近ではあまり見られなくなった伝統的な餅つきを体験して、大満足の活動となった。

⑦ 伝えよう、感謝の心

様々な活動を通して、自分たちが多くの人たちに支えられていることを実感してきた。この気持ちを伝えるために、米づくりにかかわってくださった方たちに作ったお米を差し上げ、食べていただくことにした。手紙をそえたお米のプレゼントに、地域の方から感謝の言葉をたくさんいただいた。このことで、これまでの活動がより豊かなものを感じられた。自分たちが使った田んぼには、子どもたちの発想でレンゲソウの種をまいた。春にはきれいなレンゲの花が咲くであろう。

3 実施体制



体験活動が子どもたち一人一人の学びを豊かに
はぐくむものになってほしい。そこで、地域・保
護者・学校の関係者が連携・協力する、学校支援
委員会を組織した。地域からは、生涯学習ボラン
ティアグループや、農協の青年・婦人部らの協力を
いただいている。

年3回の委員会では、米の生育に関することや
おはぎ作りへの協力等、専門的な立場から細かな助言をいただいた。とりわけ、「試行錯
誤や失敗から『子どもが考えるという経験』が、豊かな体験になるという考えで指導に
当たろう」との合意を得たことは大きな成果だった。また、支援活動を終えて、「今の時
代ではできない大切な活動をしている。」「素直な気持ちで取り組んでいて、作物に対す
る子どもたちの愛情を感じた。」「登下校の子どもを見るのが楽しみになった。」などの感
想をいただき、この活動に熱心かつ真摯に取り組んでいただいたことがうかがえた。

4 評価の工夫と指導の改善

本校は、体験活動を総合的な学習の時間を中心とした授業で行い、評価の視点を、①
課題を見つける力、②問題を解決する力、③表現する力、とした。

例えば、「病害虫が発生する時期になった。いずれ農薬を散布することになるだろうが、
そこに至るまでの子どもたちの学びの過程、つまり、問題を解決していこうとする姿こ
そ大切にしたい。」というような教師の願い（目標）は、子どもたちの表れをつぶさに見
取ること（評価）によって、問題を意識化させ解決の手だてを考えさせる、より適切な
指導へと生かされていく。具体的には、2-③「農薬をまくか?!」の実践に述べたとお
りで、このような指導と評価の一体化の姿勢は、全教育活動で一貫して行っている。

5 成果と課題（○：成果、●：課題）

- 作物を育てる活動を通して、人や自然へのやさしさや豊かな感性が育ってきている。
- 体験を通して得た知識は、実感を伴い生きた知識として子どもものものになっている。
- 問題を解決する力が身に付いてきた。体験活動での失敗や困難を自分たちの問題と
して受け止め、たくましく、しなやかに乗り越えていこうとする姿が見られた。
- その子なりの見方や感じ方が生かされ、自信をもって表現する力が伸びてきている。
- 学校支援委員会を核として支援体制を組織化したり、他学年の学習と連動して活動
したりすることで、連続・増幅された学びにすることができた。
- 子どもたちの心を豊かにする体験活動に、保護者も地域もかかわることで、お互い
に協力を惜しまないという姿勢がさらに見られるようになってきた。
- 「地域の人が自分たちの体験活動にかかわってくれている。」と、そのつながりを感じ
たり温かさを受け止めたり、魅力あふれる人と出会う価値を感じ取ることができた。
- 町教育委員会等の組織が中心になって、体験活動の計画や運営のあり方、支援体制
の整備、実践等の情報交換を行うなど、小・中・高等学校の連携を図ることができた。
- 体験活動が授業に生きる、授業の充実がさらなる体験活動を生み出す、というよう
に、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間を有機的に関連させるなどして、
より魅力あふれる年間計画を創造する。
- 学校で行った体験活動が家庭や地域で生かされるというように、体験活動を通して、
学校・家庭・地域の融合をさらに推進する。
- 体験活動を通して、「心豊かでたくましい相良の子ども」を育成するという共通理解
のもとに、小・中・高等学校の連携のあり方について考えていくようにする。

「自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」

和歌山県古座川町立高池小学校

〔学校の概要〕

- ① 学校規模
 - 学級数：7学級（内特殊学級1学級）
 - 児童数：74人
 - 教職員数：11人
 - 活動の対象学年：5年生・9人
6年生・12人
- ② 体験活動の観点などからみた学校環境
 - 人口3,700人、65才以上が占める割合42%の典型的な過疎化・高齢化が進む町にある。学校周辺には、役場、中央公民館等があり、町の中枢部を形成している。
 - 町の中央を清流古座川が流れ、面積の約96%が森林という緑豊かな農山村であるが、自然を利用した遊びや体験は、少子化による異年齢集団の弱体化とともに、その機会が少なくなりつつある。
 - 地区住民は教育熱心で、学校教育に対し非常に協力的であり、校外学習の受け入れや学校行事への参加など、多大な支援をいただいている。
- ③ 連絡先
 - 〒649-4104
和歌山県東牟婁郡古座川町高池746
 - 電話：0735-72-1556
 - FAX：0735-72-1562
 - 電子メール：
<mailto:takaike@za.ztv.ne.jp>

〔体験活動の概要〕

- ① 活動のねらい
 - 緑豊かな農山村の自然環境を生かした体験活動を通して、自然環境を大切に、郷土を愛する心情を育てる。
 - 近隣の学校間の交流を深めることにより、同世代の連携や協力、心の交流を深め、高齢者や地域の人々との交流を通して、思いやりの心、感動する心、ねばり強く行動する気力を身に付ける。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け
 - ボランティア等社会奉仕に関わる体験活動
(特別活動4単位時間、総合的な学習の時間6単位時間)
 - 自然に関わる体験活動
(特別活動12単位時間、総合的な学習の時間19単位時間、理科6単位時間、図工8単位時間)
 - 勤労体験学習と交流活動
(特別活動7単位時間、総合的な学習の時間17時間、社会科5単位時間)

1 活動に関する学校の全体計画

○ 活動のねらい

自然あふれる身近な地域を舞台に、五感を駆使した体験活動、ボランティア活動への参加及び地域住民との交流を通して、郷土に伝わる生活の知恵を習得し、自分で考え判断し表現する力、課題を解決する力を育成する。

○ 全体の指導計画

活動名	学年	活動内容	教育課程上の位置付け	期間	
水泳場クリーン作戦	6	水泳場河川敷の清掃	特活	6月4h	
校区内クリーン作戦		校区内の道路・河川敷等の清掃	総合	通年9h	
山菜採りと山菜料理	5	イタドリ・ワラビ等の採集, 調理	総合	4月3h	
昆虫飼育と観察		カブトムシ・クワガタの飼育, 観察	理科, 総合	4~7月3h	
地域探検		今まで気づかなかった町を発見	総合	4~7月6h	
水生生物の観察		古座川に生息する生物の観察	理科, 総合	4~7月3h	
ふるさと料理		学校菜園で栽培した野菜で郷土料理	総合	11~12月3h	
自然物からアート		間伐材や流木を利用して工作	総合, 図工	10~1月3h	
漁の実践と工夫		伝統漁法の仕掛け作りと魚の捕獲	総合	4~9月3h	
林間学校と星空観察		キャンプで星座の観察	特活, 理科	夏季休業10h	
わら細工		実習田で栽培した稲のわらを細工	図工	10~1月3h	
親子ふれあい教室		親子で和紙を使って工芸	特活	7月1h	
古座川町展への参加		図工作品の出品, 見学	特活	11月1h	
稲作体験		6	もみ蒔, 田植, 除草, 稲刈, 脱穀	総合, 社会	4~10月8h
餅つき会			収穫した餅米で餅つき	特活	2月3h
花作りと野菜作り			花壇・学校菜園で花と野菜の栽培	総合	通年7h
学習発表会	地域の人々を招待し学習の成果を発表		特活	12月4h	

2 活動の実際

【 事例1 「校区内クリーン作戦 ～ 古座川環境警備隊 ～ 」 】

○ 事前指導

(1) 動機づけ・意識づけ

4年生の時から取り組んできた校区内の清掃作業も3年目を迎え、児童の環境問題への関心も深まりつつある。

今年度も、身近なゴミ問題について話し合い、さらに地球規模の環境問題について考えられるよう意識づけを図る。



(2) 留意点の確認

活動を実施する際のルールや安全面など、留意点について話し合う。

○ 活動の展開

(1) 活動目標

ふるさとをきれいにし、守ろうとする気持ちを育てる。

(2) 教育課程上の位置付け及び関連する教科、領域

総合的な学習の時間を中心に、国語科、社会科、図画工作科及び道徳の時間と関連させて活動する。



(3) 活動内容

① 地域清掃

隔月2つのグループに分かれ、校区内の通学路や河川敷で空き缶・ゴミの収集活動を実施している。子どもたちにとって、自分たちの町をゴミのないきれいな町にすること、さらにボランティア活動の意義について考える機会となっている。

② ポスター制作

一人1枚ずつ環境美化を呼びかけるポスターを制作し、校区内の公共施設や事業所など6カ所に掲示している。自分たちの活動を再確認するとともに、地域の人たちへの広報活動にもなっている。

③ 紙芝居づくり

3年間の総まとめとして、活動の内容の一部フィクションを加えて、創作紙芝居『ちりも積もれば山となる』を制作、和歌山県立図書館主催「手作り紙芝居コンクール」に出品・上演し、奨励賞を受賞した。活動のあしあとをふり返り、達成感を味わうとともに、今後の取組への決意を新たにすする場となった。

○ 事後指導

コンクールの後、全校集会で紙芝居を再上演するとともに、一人ひとり感想と意見を発表し、校内での美化運動推進を呼びかけた。また、同じように活動の成果を紙芝居にまとめている学年もあり、まとめ方・発表の仕方について学ぶ機会にもなった。

【事例2「稲作体験 ～ 米米クラブ ～」】

○ 事前指導

(1) 動機づけ・意識づけ

昨年度体験した稲刈りについて思い出し、農家の方の苦勞について話し合うとともに、毎年恒例の餅つき会でつく餅米を自分たちで作ることを確認しあう。

(2) 事前学習

実習田を提供していただく農家の方をゲストティーチャーとして招き、米の種類・肥料・育て方など米作りについてお話を聞く。

○ 活動の展開

(1) 活動目標

米作りを通して、ふるさとの自然・文化・社会・人々と関わりをもち、それらのすばらしさを体感する。

(2) 教育課程上の位置付け及び関連する教科・領域

総合的な学習の時間・社会科を中心に、国語科・理科・家庭科と関連させて活動する。



(3) 活動内容

① もみ蒔・田植え

農家の方の指導で、用意していただいた苗床にもみを蒔き、校庭の一角に育苗トンネルを作り、生長を観察しながら苗になるまで育てた。〔もみ蒔〕

実習田で、農家の方から田植えの仕方・留意点についてお話を聞いた後、一斉に苗を植えていった。ぬかるみに悪戦苦闘しながらも楽しく活動した。〔田植え〕

② 稲刈り・脱穀

苗の観察と除草作業をしながら収穫の時期を迎え、農家の方から稲の刈り方・安全面の指導を受けた後、かまで稲を刈り取った。刈り取った稲をたばね、乾燥させるためのサガリ（稲架）に架けていった。どの子の顔にも収穫の満足感が見て取れた。〔稲刈り〕

現在使われている脱穀機と昔使われていた千歯コキを使って、脱穀を体験させていた。千歯コキでの作業は大変で、昔の農家の苦

労を実感できたようである。〔脱穀〕

○ 事後指導

稲の生長の観察記録を整理するとともに、農家の方の苦労や喜びについて話し合う。また、自分たちで作った餅米を使う餅つき会について計画を立てる。



3 体験活動の実施体制

○ 学校支援委員会

児童の体験や経験は地域の人々との関わりの中で深まっていく。その意味で、地域の人々の支援は必要不可欠なものとなる。そこで、「学校支援委員会」のメンバーとして区長・老人会長・婦人会長に入っていただき、活動計画・内容について助言していただいている。

○ 町内小中学校・関係機関との連携

町内の小学校間との交流学习の中で体験活動に関する情報の共有化を進めている。また、行動範囲が広い活動では、教育委員会を通じて他校のスクールバスを借り上げ、児童の移動に利用している。調べ学習などでは、隣接する中央公民館をよく利用している。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

評価の方法については研究中の段階であるが、各担任が独自に観察記録簿を作成し、児童の活動の様子について記録している。また、活動の後には「ひと言感想」など作文を書かせたり、絵で表現させたりすることで、子どもの学びの広がり深まりを評価している。さらに、その結果を現職教育で提案し、全職員の共通理解を図るとともに指導方法について協議している。

5 活動の成果と課題

体験活動に取り組む中で、いろいろな人々との交流を深め、ふるさとを再発見することができた。また、一つひとつの活動をやり遂げた自信が新たな活動への意欲につながっており、その過程の中で、郷土を愛する心情も強くなっている。

今後さらに、子どもたちが主体的に関われるような活動を組織すること、教師の支援の仕方とタイミングについて研究すること、子どもたちの学びの広がり深まりを評価する方法を研究すること、家庭・地域との連携・連帯を強化していく必要がある。

【小学校・文化や芸術に関わる体験活動】

大谷焼の窯元になろう

なると ほりえきた
徳島県鳴門市堀江北小学校

学校の概要

- ① 学校規模
 - 学級数：7学級（内障害児学級1）
 - 児童数：189人
 - 教職員数：14人
 - 活動の対象学年：5年生・32人
- ② 体験活動の観点などからみた学校環境
 - 校区に200年余り昔から受け継がれてきた伝統産業の「大谷焼」の窯元が8軒ほどあり、鳴門市の観光地の一つとなっている。
 - 毎年11月に大谷焼陶業協会が中心となって、地域あげての「窯祭り」が開催され、30年を経た今では、イベントとして定着し、県内外から多数の人が訪れている。児童にとっても身近で楽しみな行事である。
 - 平成12年2月に窯元さんの指導と協力を得て設けられた登り窯が校庭にあり、全校児童が大谷焼の作品づくりに取り組んでいる。
- ③ 連絡先
 - 〒779-0302
徳島県鳴門市大麻町大谷字中筋41
 - 電話：088-689-0016
 - FAX：088-689-1445
 - ホームページ：
<http://www.tv-naruto.ne.jp/horie-n01/>
 - 電子メール：horie-n01@tv-naruto.ne.jp

体験活動の概要

- ① 活動のねらい
 - 地域の伝統産業である大谷焼について調べ、大谷焼に携わる窯元さんとの交流を通して、地域の伝統文化を大切にしていこうとする態度を育てる。
 - 大谷焼作品づくりや窯焼き、窯祭りでの販売活動などの体験活動を通して、地域の人々と交流し、郷土を愛する気持ちをもつことができるようにする。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け
 - 学習計画をたてよう
(総合的な学習の時間2単位時間)
 - 大谷焼を徹底解剖しよう
(総合的な学習の時間15単位時間)
 - 大谷焼職人さんに挑戦
(総合的な学習の時間20単位時間)
 - 窯祭りに出展しよう
(総合的な学習の時間20単位時間)
 - 大谷焼のすばらしさを全国に発信しよう
(総合的な学習の時間18単位時間)

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

本校では平成12年度に地域の窯元さんの協力を得て、校庭に登り窯が設置された。それをきっかけに児童が作品を作り、登り窯で素焼きをし、釉薬を塗り、本焼きをするという一連の活動を行うようになった。また、昨年度から陶業協会主催の窯祭りでの販売活動を始めたことにより、窯元さんや窯祭りに訪れた方々とさらに交流を深めることができた。今年度は5学年

の総合的な学習に「大谷焼の窯元になろう」という単元を位置づけ取り組んできた。ねらいは以下の通りである。

- ① 地域の伝統産業である大谷焼について調べ、大谷焼に携わる窯元さんとの交流を通して地域の伝統文化を大切にしていこうとする態度を育てる。
- ② 大谷焼作品づくりや窯祭りでの販売活動などの体験活動を通して、地域の人々や県内外から訪れた多くの人々と交流し、郷土を愛し、郷土に誇りをもつことができるようにする。

(2) 全体の指導計画

- ① 活動の名称 「大谷焼の窯元になろう」
- ② 実施学年 5年
- ③ 教育課程上の位置付け 総合的な学習の時間
- ④ 活動内容と時期、単位時間数、各教科等との関連

時 期	単位時間数	活 動 内 容	各教科等との関連
4月	2時間	学習計画を立てよう	
5～6月	15時間	大谷焼を徹底解剖しよう 大谷焼の土の特徴、野焼き体験 窯元さんを訪ねよう、大谷焼の歴史調べ	(理) 種の発芽と土の関係 (社) わたしたちの生活と工業生産
7～10月	20時間	大谷焼の職人さんに挑戦しよう 土づくり、成形、窯入れ、素焼き、窯出し 色つけ、本焼き	(図) 粘土を使って (人権) 正しい職業観をもつ
10月～12月	20時間	窯祭りに出店しよう 販売に向けての準備、パネルづくり 学んだことをまとめよう	(国) 調べたことを発表しよう (社) 伝統産業
1月～3月	18時間	大谷焼のすばらしさを全国に発信しよう	(社) わたしたちの生活と情報 (特) 学習発表会

2 活動の実際

(1) 事前指導

1～4学年でも窯元さんを講師に招き、大谷焼の作品づくりに取り組むことで大谷焼が身近なものとなるようにしている。また、4学年の児童は、窯祭りに出店した5学年の店を見学したり、進級前に5学年の総合的な学習の発表を聞いたりすることによって学習に対する意識を高めている。

(2) 活動の展開

① 大谷焼を徹底解剖しよう

郷土の伝統文化としての大谷焼をさらに詳しく知るために、窯元さんを見学し、作業の様子や職人さんの思いを聞き取る調べ学習を行った。

② 大谷焼の職人さんに挑戦しよう

5学年では窯元さんを講師として土づくりに取り組んだ。鮮やかな手つきで土が練り上げられているのを見て、児童も土練りに挑戦し、作品づくりへの意欲を深めた。作品は全校児童が



窯元さんによる土練りの指導

作成し、登り窯で焼く活動は5学年児童が行った。8月に窯詰め作業と素焼き、9月に窯出し作業と釉薬による色つけ、10月には再度窯詰め作業を行い、本焼きに取り組んだ。児童は、素焼きで800℃、本焼きでは1200℃の温度まで窯の温度を上げるための作業を見学したり手伝ったりしながら、職人さんの苦労を想像し、できあがりを楽しみにしていた。本焼き後の窯出しでは、一つ一つの作品の仕上がりに大きな歓声が上がった。

③ 窯祭りに出店しよう

1 私達もお店を出そう

窯元さんに聞き取りをし、作品づくりを進めていく中で「窯祭りで作品を売ってみたい。その利益で窯の修理を行いたい。」という児童の声から始まったのが、昨年度の窯祭りでの販売活動である。その活動を引き継いで今年度も5学年児童が販売活動に取り組んだ。児童は毎年作っている自分の作品の他に、箸置きや置物などの小物づくりに取り組み、今年度は約280点の売り物を作成した。また、これまでの活動をわかりやすくパネルや新聞にまとめて、当日に来てくださったお客さんに説明できるように準備を進めた。

2 お客さんとも交流したい

窯元さんを訪ね、大谷焼について調べる体験活動を通して、児童は地域の人とふれ合う楽しさを学んできた。その経験から、窯祭り当日に児童の店に足を運んでくださったお客さんとも交流したいという願いを込めて、販売作品には小さなメッセージカードをつけた。カードには作品の説明や思いを書き、本校の住所とカードを書いた児童の名前を添えた。

3 さあ、当日！

窯祭りは11月の第2土曜、日曜に行われている。当日は、たくさんの方が児童の店を訪れてくださった。説明に熱心に耳を傾け、「可愛い作品ができたね。」と声をかけてくださるお客さんに、児童は生き生きとした表情で応対していた。また、普段は消極的な児童が「私達の店に来てください」と大きな声で呼びかけたり、挨拶をしたりする様子も見られ、自分たちの店での販売体験を通して自己表現力を身に付けていることを実感することができた。そして、児童の作品は完売。昨年度来てくださった方が児童の作品を楽しみに今年も来店して下さったり、新聞記事を見て足を運んで下さったりした方も見られ、この活動が窯祭りの中で根付いていくことを感じる事ができた。



「私達の作品、買ってください」

を

4 お客さんから手紙が来たよ

窯祭りが終わって数日すると、作品を買ってくださった方々からメッセージに対するお返事が届くようになった。中には「作品を使っているよ。」と写真を添えてくださった方もあり、児童は大喜びであった。自分たちの活動によって、大谷焼が各地に広まっていると実感することができた。

5 大谷焼を広めよう

昨年度は大谷焼販売活動での利益を窯の修理に役立て、お世話になった窯元さんや手紙をくださった方にお礼状を出し学習は終了したが、今年度は大谷焼を全国に広げていこうという学習へと進めている。児童は体験を通して自らが学んだ大谷焼の素晴らしさを全国の方々に知ってほしいと目を輝かせている。

(3) 事後指導

体験活動を通して、地域の方とつながる力や地域に誇りをもつ気持ちを持ち続けるよう指導をしている。本校では縦割り班でのボランティア活動やお年寄りとの交流を行っている。その場面で大谷焼を通しての体験活動で培った力を発揮できるような機会を設けている。さらに、5学年での活動を生かし、6学年の総合的な学習の時間では、大谷焼による卒業制作を行ったり、地域の方々の協力を得てバザーを行ったりする活動に取り組むなど継続した指導を心がけている。

3 体験活動の実施体制

(1) 学校支援委員会の体制

学校支援委員会は、大谷焼陶業協会の8名の窯元さんにより構成され、登り窯の維持・補修、作品製作時の指導、窯詰め・火入れ時の指導にご協力をいただいた。

(2) 配慮事項

本焼きでは、1200℃の高温となる登り窯の近くでの作業をするため、事前点検や修理を丁寧に行い、児童の安全管理には十分に配慮した。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

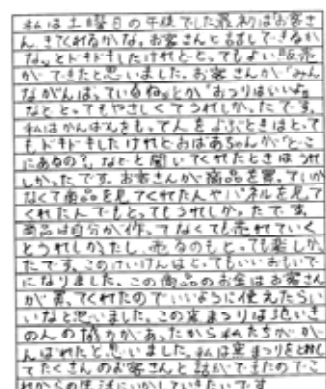
今年度の総合的な学習では、本校児童の課題である「主体的に学ぶ意志・能力・態度」を養うために、「自然と関わる」「人と関わる」「文化と関わる」という3つの大きな柱を設けて取り組んでいる。評価に関しては「気づく力」、「関わる力」、「表現する力」、「生かす力」の4つの観点と評価規準項目を設けている。5学年では、年間を通して大谷焼に関する体験活動を行っているため、小単元の場面で関わる対象を明らかにし、目的をもった活動ができるように努めた。そして、活動を振り返り評価したことを次の活動に生かしていくようにしている。

5 活動の成果と課題

児童はこの体験学習を通して、地域への誇りと感謝の気持ちをもつことができるようになった。それは地域の方との交流から学び、自ら行事に参加するという体験があったからであろう。また、多くの人と関わることによって、表現力と「私達にもできる」という自信を身に付けた。児童の感想にも活動を通して得られた感動や自信が生き生きとした言葉で綴られていた。充実した体験活動は、児童に自己表現する力を与えるものであるということを改めて実感した。

今後もさらに地域との交流を深め、地域に根ざした豊かな体験活動を行っていきたい。そして、これらの活動を通し、主体的に学ぶ意志と能力をもった児童の育成に努めたい。

窯まつりでの販売体験について
～大谷焼の窯元になろう！総合的な学習の時間～



窯祭り後の児童の感想

【中学校・進路学習に関わる農業体験活動】

農 家 生 活 体 験 学 習

神奈川県川崎市立東高津中学校

学 校 の 概 要

- ① 学校規模
 - 学級数：11 学級（内特殊学級 1 学級）
 - 生徒数：339 人
 - 教職員数：27 人
 - 活動の対象学年：2 年生・116 人
- ② 体験学習の観点からみた学校環境
 - 人口 130 万人の川崎市のほぼ中央に位置し、JR 南武線と東急田園都市線が交差する武蔵溝ノ口駅と大きな商業地帯に近接している。
 - 20 数年前までは一部に田畑もあったが、近年は宅地化が進み、マンション建設も盛んである。多くの子どもたちは核家族で育ち、三世同居や大家族での生活体験がない。
- ③ 連絡先
 - 〒213-0013
神奈川県川崎市高津区末長 1274 番地 7 号
 - 電話：044-833-2882
 - FAX：044-822-5082
 - E-mail：KE302701@to.keins.city.kawasaki.jp

体 験 活 動 の 概 要

- ① 活動のねらい
 - 農家生活の体験を通して、勤労の意義や生産活動の大切さについて理解を深める。
 - ホームステイによる人々とのふれあいを通して心の豊かさを高めるとともに、社会性や自主性を養う。
 - 職業としての農業を体験的にとらえ、今後の進路学習に主体的に取り組む態度を身につける。
 - 東北地方の自然や文化に触れ、見識を深めるとともに、豊かな感性を育む。
- ② 内容と教育課程上の位置付け
 - 農家体験学習（古代米の栽培、岩手県東和町での宿泊など）
・・・総合的な学習の時間 40/70 時間
 - 職業体験学習（進路学習、市内各所での技能職体験など）
・・・総合的な学習の時間 30/70 時間

1 活動に関する学校の全体計画

○活動のねらい

本校では、教育方針のひとつである「生きる力を育成する教育活動の推進」を実践するために、生徒一人ひとりの思考力、判断力、技能・表現力を高めることを目指して学習活動の工夫改善に取り組んでいる。

1 学年では「情報教育」に取り組み、様々なメディアを通じた調べ学習の基礎を身につけ、「自ら調べ、自ら考える」生徒の育成に向けての足がかりと



稲づくり(田植え)

する。

2年生では、10月に行われる岩手県東和町での農家生活体験学習に向けて、年度当初から東和町についての調べ学習や稲（古代米）の栽培を中心に学習する。

古代米については、様々なメディアを通してその栽培法の模索から始め、「米づくり」を通して、農家の人々の知恵や工夫に気づかせる。また、自然と向き合うなかで農業を営む人々の願いや思いについて考えさせ、「自ら調べ、自ら考える」生徒の育成を図る。

農家生活体験学習の後は、文化祭での発表に向けてそのまとめを行う。また、次のステップとして職場体験学習等を行い、市内の自動車整備や理容・美容の職業としての技能を体験したり、お話を聞いたりする学習を通して、自らの進路に対して主体的に関わっていく生徒の育成を図っていく。



小雨のなかの稲刈り

○ 全体の指導計画（農家生活体験学習に関して）

※東和町「農村振興課」とは随時連絡をとりながらすすめた。

- ①東北地方・岩手県・東和町の学習（4月）
- ②農業・林業・酪農などについての学習・稲づくり（5月～10月）
- ③ホームステイグループのホームステイ農家の決定（8月～9月上旬）
- ④ホームステイ農家との手紙や電話交流・ビデオレター発送（9月～）
- ⑤入村式、離村式などの準備（9月）
- ⑥農家生活体験（10月8日～10日・2泊3日）
- ⑦ホームステイ先への礼状発送（10月）
- ⑧体験学習のまとめ（文化祭発表、10月）
- ⑨総合的な学習個人ファイルのまとめ

2 活動の実際

(1) 日 程 平成16年10月8日（金）～10日（日） 2泊3日

宿泊場所 岩手県和賀郡東和町の農家に2名ずつ分宿

引率教諭 7名

日程の概要

1日目 10月8日（金）	2日目 10月9日（土）	3日目 10月10日（日）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 9:00 JR武蔵新城集合 ・ 11:16 東京駅発 ・ 14:30 新花巻駅着 ・ 15:00 東和町到着、見学 ■開村式・歓迎会・対面式 ■農家生活体験開始 ※2～3人ずつ農家50家庭にホームステイ 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 終日農家生活体験活動 ※農業体験は、前日に続き、各農家ごとに、りんごや米、野菜類の収穫や出荷作業、田や畑の手入れ、家畜の世話、そして日常の家事手伝いなどを行う。 ■教員は各農家を巡回訪問（生徒観察、農家への挨拶等） 	<ul style="list-style-type: none"> ■農家生活体験終了 ■地区別お別れ会・離村式 12:00 東和町出発 12:41 新花巻駅発 16:00 東京駅着 17:00 JR武蔵新城駅到着、解散

(2) 農家生活の体験を終えて

生徒一人ひとりの体験をもとにパネルにまとめ、文化祭で発表した。

そこからは、農家生活の体験を通して勤労の意義や生産活動の大切さを学ぶことができる体験学習であったことや、また学校で学んだ知識や学習の成果を確認したり定着するためにも有効な機会であったなどの感想がまとめられている。

事前に取り組んだ古代米の栽培では、田植えから刈り入れまでの約半年間、台風に対する防護など様々な問題に生徒は真剣に取り組んできた。今秋は例年になく台風による被害が多かったため、自然に向き合って生きる農業の厳しさをより一層認識したようである。こんなとき、東和町の農家ではどのような思いで農作業をしているのであろうか。また、どのような対応をしているのだろうかと思いをめぐらす生徒も多数見受けられた。



りんごの出荷作業体験

農家生活の実際では、東和町の豊かな自然が、実は人間の手で長い時間をかけて作り上げられ、守りぬかれてきた自然であること。稲刈りや野菜の収穫作業では、人力だけでなくコンバインなどを用いた農業の機械化が進んでいること。生活のために兼業化が進む農家の実態があることなどを目の当たりにしながら、学校での古代米の栽培では得られない農家の現実や農業や自然について見識を深め、さらに新たな課題をつかんだ生徒も少なくなかったようである。

さらに、作業で床に落ちたもみをひと粒ひと粒拾い集める生徒、農業についてつっこんだ質問してくる生徒の姿から、一人ひとりの生徒に感じるものがそれぞれあったようで、体験学習後の生徒の発表も興味深いものとなった。

また、短期間ではあるが、農家でのホームステイを通して地元の人々の優しい気持ちにふれ、お別れ会では感激して涙する生徒も多く見られた。



お別れ会でのひとコマ

卒業生のなかには、実際に職業としての農業を選び、東和町に移り住んで生活している者もいること考えると、こうした体験が子どもたちに大きな影響を与えていることを実感するものである。

なお、今回東和町では「和紙漉き体験」「郷土料理の調理体験」など、東北地方の文化に接する体験も行うことができた。

[保護者の反応]

8年前から続いているこの取り組みに対して、生徒の保護者からは、「中学生時代に自分の家庭を離れ、よそのお宅で寝起きさせていただけることはとても良い経験になると思う。」「働くことの意義を身をもって体験する中で考えて欲しい。」「社会性や自主性が少しでも身に付くのでは……。」などの意見が例年寄せられており、非常に好意的に受け止められている。

(3) チャンス教育として

こうした体験学習は、日頃の学校生活に参加できないでいる生徒、いわゆる不登校生徒に

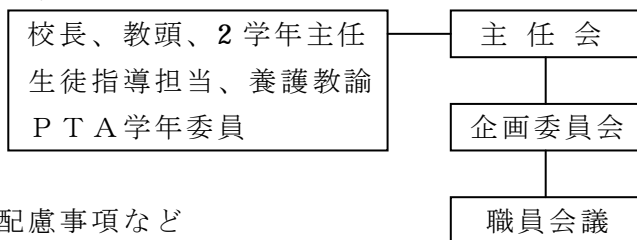
対するチャンス教育の実践の場にもなっている。

普段の授業には参加できない不登校生徒にとっては、教科学習とは違い作業的な活動が中心とあること、ホームステイが 2～3 人の少人数で行われることなどから、本人のやる気があれば参加しやすい学習活動である。担任が事前学習の日程や作業行程を家庭や本人に連絡することで何人かの生徒がこの体験学習に対して意欲を見せ、準備段階のビデオレターの撮影、農家への手紙による交流などに積極的に取り組み、当日も休まず元気に参加してきた。

こうした事前活動を通じて、集団活動へも徐々に加わることができる生徒も出てきたことは、副次的な効果として注目したい。

3. 体験活動の実施体制

○ 農家生活体験学習支援委員会の体制



○ 配慮事項など

- ・ 予算の確保
- ・ 日程調整（テスト、学校行事、刈り入れ時期など）
- ・ 実施期間中の特別時程
- ・ 救急体制



稲づくり観察カード

4. 体験活動の評価の工夫と指導の改善

- ・ 稲作観察カード
 - ・ 体験学習のまとめと発表
 - ・ 担任による個別訪問・観察
- ※日頃の学校生活では見ることができない生徒のいきいきとした活動は生徒理解の良い資料となった。



稲づくり(刈り入れ前)

5. 活動の成果と課題

この「農家生活体験学習」の実施については課題も少なくない。まず、東和町との連絡調整などの事務的処理を小規模の本校ですべてまかなうのは職員の負担がたいへん大きい。また、東和町では活性化事業の一環として町全体を上げて「農家生活体験学習」の支援に取り組んでくれているものの、町民の高齢化、兼業農家（土日農業）化、離農家庭の増加で、受け入れ農家が減少しているのが実状である。例えば、今年度のホームステイ受け入れ地区の一つは東和町の中心部に位置した住宅地域であり、農業体験は別の農家や施設を利用するケースも出てきている。

しかしながら、この「農家生活体験学習」に期待する保護者は非常に多い。この活動があるために本校に入学してくる生徒もおり、本校の大きな特色となっている。密度の高い体験ができる貴重な機会だけに、こうした課題を克服して今後とも継続していくことが望まれる。

【中学校・人間関係づくりに関わる体験活動】

3年間を通じての園児交流～コミュニケーション活動の一環として～

鳥取県境港市立第一中学校

学校の概要

- ① 学校規模
 - 学級数：14学級(内障害児学級3学級)
 - 生徒数：381人
 - 教職員数：27人
 - 活動の対象学年：2年生・124人
- ② 体験活動の観点などからみた学校環境
 - 人口約4万人の都市に所在する。古くから港を中心に発展し、恵まれた水産資源を背景に漁業や食品加工がさかんである。近年は貿易港としても賑わいを見せている。
 - 市街地に所在するため、校区内には多くの事業所が建ち並んでいる。体験活動を実施するには都合の良い環境にあり、数年前から多くの事業所に協力いただいている。
- ③ 連絡先
 - 〒684-0033
鳥取県境港市上道町1840番地
 - 電話：0859-42-3711
 - FAX：0859-42-3712
 - 電子メール：sakai1-j@mailk.torikyo.ed.jp

体験活動の概要

- ① 活動のねらい
 - 関係機関の協力を得て、福祉活動や勤労生産活動などの体験活動を行い、地域の人々との交流を深め、支え合い、助け合う態度を育成する。
 - 様々な異なる年齢層の人々との交流体験を積むことにより、好ましい人間関係を構築する力を育成する。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け
 - 園児交流活動
(総合的な学習の時間8単位時間、特別活動5単位時間)
 - 職場体験活動
(総合的な学習の時間30単位時間、特別活動10単位時間)

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

- ・ 保育所を訪問し、園児とのレクリエーションによる人間交流を通して、人との関わり方を学ぶとともに、生徒同士の良好な人間関係を築く。
- ・ 3年間の交流を通して、園児の成長過程を目の当たりにし、「命」の尊さを感じ取る。

(2) 全体の指導計画

全学年において、年間2回(5～6月、1～2月)の交流を実施している。異年齢の園児との交流は、望ましい人間関係の構築において大きな効果を発揮するものとする。また、3年間同じ園児をパートナーとする交流(1年時：年少組、2年時：年中組、3年時：年長組)を基本方針とし、園児の成長を目の当たりにすることで、生徒に「命」の尊さを体感させていきたい。交流にあつての事前・事後の活動は特別活動(5単位時間)、交流活動は総合的な学習の時間(8単位時間)として扱い、技術・家庭における保育領域の直接体験学習にも位置づけている。

2 活動の実際

(1) 事前指導

- ① 各保育所の交流人数を確認する。(学年主任)

梅檀保育園 (32名: 男子18名, 女子14名)
旧1-1 (31名: 男子19名, 女子12名)
聖心幼稚園 (43名: 男子19名, 女子24名)
旧1-2 (32名: 男子18名, 女子14名)
台場保育所 (30名: 男子20名, 女子10名)
旧1-3 (31名: 男子17名, 女子14名)
上道保育所 (27名: 男子13名, 女子14名)
旧1-4 (30名: 男子17名, 女子13名)

- ② 5/11 (火) 4限

・昨年度の交流名簿を参考に、交流相手を確認する。 → 交流名簿作成
手紙の作品例

・手紙書き (第1時)

- ③ 5/13 (木) 1限

・手紙書き (第2時)

・名札の作成

- ④ 5/13 (木), 14 (金) 放課後

・交流名簿を各保育所・幼稚園に持参し、
打ち合わせを行う。

- ⑤ 5/14 (金) 終会

・旧学級にわかれて事前指導



【①～⑤についての詳細】

- ① 校区内に所在する4つの保育所・幼稚園(梅檀保育園・上道保育所・台場保育所・聖心幼稚園)に協力をいただき、交流活動を展開している。
- ② 一人一人の生徒が自分の交流する園児に手紙を書いている。そして、生徒代表が事前に交流先にその手紙を届けることが交流の足がかりとなっている。キャラクター本等を参考に、イラストを描いたり色使いをカラフルにするなどして、どの生徒も園児が喜びそうな工夫をこらした手紙を作成している。
- ③ 毎回交流時の始まりには、折り紙で作成した名札を園児につけている。生徒同士でコミュニケーションをとりながら名札の形を工夫したり、安全面などにおいても園児の立場で考える姿がよく見られた。
- ④⑤ 各交流先から受けた注意事項を伝達・指導し、下記の点について指導の徹底を図っている。

園児の話をお聴くときは、目線を合わせる。わからないことは積極的に保育所の先生に尋ねる。
緊急の場合は、すぐに先生に連絡する。爪は短くする。
パートナーの園児には責任を持ってかかわる。

(2) 活動の展開



集会活動の様子

それぞれの生徒が交流相手をリードする立場に立つため、控えめな性格の生徒も積極的に園児に関わっている。普段の生活ではなかなか見ることのできない能力を発揮する生徒もあり、生徒同士が互いに新たな発見をするという場面も珍しくない。園児と共に、汗だくになって活動している表情には、充実感が溢れているように見える。同じ施設内であっても、屋外・屋内での様々な活動状況が見られ、交流園児の活動を支える生徒の姿がある。集会活動を設けて活動している幼稚園もあるが、これについては園の主導で行われている。

(3) 事後指導

交流が終わると、生徒は活動の反省を自分自身の記録に残している。また、班ごとに色画用紙等を利用したまとめを作成し、各保育所・幼稚園に届けている。このまとめには、園児と一緒に写った写真や自分自身の活動の感想、園児への伝言などが盛り込まれている。そして、それぞれの保育所・幼稚園の廊下等に掲示していただいているため、園児の保護者にも交流の様子がよく伝わり好評である。各保育所・幼稚園からも生徒向けにメッセージをいただくこともあり、交流は徐々に深まっている。クリスマスカードや年賀状を贈る活動も行っている。

【交流直後の生徒感想】

他の人も園児に対してすごく気をつけていたのが感じられた。積極的に話しかけたりしていてとても良かった。それに、友達が楽しそうにしている、いつもと違う面を見れた気がして、なんだかとっても嬉しかった♪
でも、友達同士で話しているのもちょっと見かけた。
自分より小さい園児とかかわるのは3回目だけど、そのたびに学ぶことがあった。思いやりの心を持って相手にとって楽しい時間になるよう、気をつけることができた。

クリスマスカード作りの様子



3 体験活動の実施体制

(1) 学校支援委員会の体制

勤務先又は機関・団体名	職名	勤務先又は機関・団体名	職名
聖心幼稚園	園長	境港市立第一中学校PTA	会長
上道公民館	主事	境港市立第一中学校	校長
ガソリンスタンド	店長	境港市立第一中学校	2年学年主任
境港商工会議所	課長		

(2) 配慮事項等

園児・生徒ともに、けがのないような活動になるよう、各保育所・幼稚園との間で、担当者同士が事前の打ち合わせを行っている。それぞれの所・園の指導方針や要望を把握し、生徒に対する指導を徹底していくことが重要である。また、障害があり、交流が困難と思える園児や生徒については、園側や中学校側の教職員が交流を補佐し、円滑な交流が行われるように配慮している。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

交流活動終了後には、毎回活動の振り返りを行い、評価の材料にしている。自らの活動とともに、他の生徒の活動をも振り返ることにより、回目の交流に向けての課題意識は高まっているように思われる。

また、生徒の感想を抜粋して、学年・学級通信などで全体に紹介している。このことは、自分では気づかなかった視点での、反省事項や交流方法を発見することにつながっているようである。友人の長所を改めて発見する生徒も多く、個々の人間関係づくりや学級・学年集団づくりにも効果をもたらしている。目的意識が薄いままに活動に参加している生徒については、活動の意義についての指導を徹底するよう努めた。

5 活動の成果と課題

この活動を通して、生徒には相手の立場に立って物事を考えようとする姿勢が見られるようになった。このことは、思いやりの気持ちを育むという点で、大きな成果であると考えられる。また、3年間、同じ園児との交流を継続し、その成長の様子を体感することは、命の尊さ・大切さを実感として学び取るという点でも、大きな成果があるように思う。

反面、課題も浮き彫りになってきた。旧学級での活動となるため、活動の指揮を学級担任が執ることができず、学級単位でのまとまりに欠ける印象は否めない。また、本校および各保育所・幼稚園の双方において数多くの転出入が見られ、人数調整に労を要した。編入園児数が10数名増加したため、1人で2人の園児を担当することになり困惑した生徒もあった。逆に2人の生徒で1人の園児を担当する保育所もあり、交流相手の人数配分が均等にならないということは課題のひとつである。また、3回目の交流となり、生徒の中に慣れが生じてきた部分もある。

来年度については、これらの課題の改善や、生徒の意識を一層高めるための具体的な方策をとっていきたい。例えば、下記の点があげられる。

- ① 4つの保育所・幼稚園との連絡を密に取り、事前の打ち合わせにおいて、この体験活動のねらいについての共通理解を一層深める。
- ② 交流の目的を生徒に繰り返し確認しながら、この活動のねらいとするところを達成できるような指導を重ねていく。
- ③ 生徒自身が、前年度の自分の体験をもとに主体的に交流計画を立て、その活動に責任を持って取り組めるような手立てをとる。

最後に、園児の家庭環境の変化については、活動準備の段階で一層の配慮を心がけたい。改姓など、プライベートな内容に関わる場面が多々あるからである。このことは、3年間という継続的な交流を導入する際には気づかなかった点であり、生徒への適切な指導が必要であると考えられる。

総合的学習の時間を発展させ、

地域とともに取り組む心豊かな体験活動

沖縄県^{ひらら}平良市立^{いけま}池間中学校

— 学 校 の 概 要 —

① 学校規模

- 学級数：3学級
- 生徒数：17人
- 教職員数：12人
- 活動の対象学年：1，2年生・11人
3年生は職場体験学習は行わない。

② 体験活動の観点などからみた学校環境

- 宮古本島の北西に位置する周囲19km、面積2,79km²の馬蹄形の島である。
世帯数384戸、人口773人。
- かつてはカツオ一本釣り漁が隆盛で漁業中心の生活であったが高齢化と人口減少で衰退し、現在は農業や市街地への勤めが多い。
- 平成4年に橋がかかり宮古島本島と往来が自由になったが生活が便利になる中で島内にもポイ捨てゴミ等が見られるようになった。
- 生徒たちは自然環境に恵まれているもののその保護やゴミ問題などの身近な環境に対する関心はやや薄い。
- 島内は雇用の場が極端に少ないため生徒の将来の進路や職業への意識は非常に薄い。職場体験学習はそれらの意識変換の動機づけや進路指導を図る上で有効である。
- H15、16年度平良市教育委員会「環境教育推進校」として指定を受けている。

③ 連絡先

- 〒906-0421
沖縄県平良市宇池間903番地
- 電話（FAX）0980-75-2013
- 電子メール：ikema-jhs@mail.miyako-ma.jp

— 体 験 活 動 の 概 要 —

(1) ボランティアなど社会奉仕に関わる体験活動

① 活動のねらい

- 島の環境問題に関心を持ち、よりよい環境の保全・創造に主体的に取り組む行動できる生徒の育成。
- 地域住民とともに環境問題を考え、自然を大切にし、ふるさとを愛する気持ち育てる。

② 活動内容と教育課程上の位置付け

環境T I M E〔19時間〕

- ア. 530運動 (特活4)
- イ. 海浜漂着ゴミ調査 (総5)
- ウ. 廃油石けんづくり (特活3)
- エ. 校内美化作業 (総2)
- オ. 島内公衆トイレ清掃 (総2)
- カ. 池間大橋クリーンアップ作戦 (総3)

(2) 職場・職業・就業に関わる体験活動

① 活動のねらい

- 地域の職業環境を理解し、実際に職場を体験することで職業観と勤労観を身に付け将来の進路選択に役立てる。

② 活動内容と教育課程上の位置付け

- 1，2年生による3日間の職場体験学習の実施〔18時間〕
- 2月2日～4日の3日間1，2年生による職場体験学習を行う。生徒の希望職業調査により市内8事業所の協力のもと実施する。

1 活動に関する学校の全体計画

総合的な学習の時間は100時間〔毎週水2時間、金1時間の3単位で実施〕

環境T I M E〔19時間〕

(1) 活動のねらい

- ①様々な環境問題に対して関心が持てる生徒の育成
- ②環境に対して、豊かな感性をもつ生徒の育成
- ③自分の責任や使命を理解し、積極的に行動できる生徒の育成
- ④実践活動に必要な知識・技能を身につけ、家庭や地域社会で活動できる生徒の育成

(2) 全体の指導計画 ☆印が体験活動時数

①活動の名称「環境T I M E」と計画

学期	月	時数	取組の名称
1	4	総1	環境T I M Eガイダンス
	5	☆特活4	530運動
	6	☆総5	海浜漂着ゴミ調査
	7	☆総3	廃油石けんづくり
2	10	総6	環境(エコ)探求学習発表会
	11	☆総2	校内美化作業
	12	☆総2	島内公衆トイレ清掃
3	3	☆総3	池間大橋クリーンアップ作戦

②実施学年 第1学年～第3学年

2 活動の実際

(1) 事前指導

環境T I M Eとしての6月の環境月間を前に取り組みのガイダンスを行い、内容とねらいを確認する。スタートとなる530運動については生徒会役員とともに島内のゴミの不法投棄箇所をチェックし島民へのボランティア参加を呼びかけて、環境月間取り組みへの動機づけを図る。

(2) 活動の展開

ア.「530運動」池間島クリーンアップ作戦第一弾 (特別活動4時間)

- ・6月の環境月間を前に全国的に行われている「530運動」を主体的に計画し実施。
- ・島内の美観を損ねている場所を生徒とともに調査し、前浜(マイイ)の護岸下への不法投棄地域を地域住民(約100人参加)と一緒にボランティア清掃を行う。
- ・清掃に先立ち、地域の親子ラジオ放送で生徒会より広報活動を行い協力を呼びかける。
- ・回集したゴミは市の清掃センターへ地域ボランティアとともに搬出する。
- ・海、海岸への不法投棄の現状を訴える機会となった。(新聞報道)

職場体験学習〔18時間〕

(1) 活動のねらい

- ①個々の生徒がしっかりとした職業観、勤労観を身に付け、主体的な進路選択自己の将来の生き方を考える手だてとする。
- ②働く人々と実際に関わることでその職業のやりがいや規律、礼儀作法を学ぶと共に働くことの楽しさ、生きがい、厳しさに気付く。
- ③自分の住む地域社会における職業環境を理解し地域を見直す機会にする。

(2) 全体の指導計画

①活動の名称「職場体験学習」

②実施学年 第1・第2学年(11人)

③指導計画 全34時間のうち体験活動は18

月日	取組内容	時数
12/19	生徒の職場体験希望調査	特活1
1/7	オリエンテーション	総合1
1/12	事業所への受け入れ願い	総合2
1/14	名刺作成と職業調べ	総合1
1/12	履歴書作成	総合1
1/21	業者担当との日程調整	総合1
1/25	業者担当の打ち合わせ	総合2
2/1	最終打ち合わせと出発式	特活1
2/2~2/4	☆職場体験学習本番	☆総合18
2/9	作文、お礼状	総合2
2/16	体験新聞づくり	総合2
2/18	アンケートとまとめ	総合2



護岸下より、古自転車、電化製品など2 tトラック3台分の不法
 投棄ゴミを回集

イ. 「海浜漂着ゴミ調査プログラム」池間島クリーンアップ作戦第二弾 (総合5時間)

月日 (曜)	単元 時数	時間	学習活動 (生徒)	先生の支援 用意するもの	スナップ
6 / 9 (水)	総1	50	「海浜漂着ゴミ調査」プログラム 事前ガイダンスを行い4年連続の海浜漂着 ゴミ調査についての意義を確認し、積極的 な活動を促す	来る18日の海浜漂着 ゴミ調査の連絡。	
6 / 16 (水)	総1	50	ひげ先生の書簡 「漂着ゴミ 海岸線の今をおって」 を資料活用した事前学習＝学校	海浜漂着ゴミ調査の意 義を理解させる。興味 ・興味、関心の喚起	
6 / 17 (木)	道1	50	総合的な学習の時間と横断させた教科 ・領域面での環境に関する単元の授業 道徳 (全学年)「飛べアホウドリ」	【道徳】 環境保護に取り組む姿 勢、使命感を養う	
6 / 18 (金)	8:40 総1	45	平良海上保安署署長による講義 ・日本の漂着ゴミ事情 ・調査の要領についての説明	平良海上保安官に よる講義 ワークの用意	
	9:30 移動	15	準備 と カギンミ浜への移動	学校車で移動	
	9:45 総1 ----- 総1 ----- 11:45 総1	約 1 2 0 分	☆体験活動 カギンミ浜の清掃 ・島の北東にあるカギンミ浜に打 ち上げられた漂着ゴミを回集し、 ゴミの種類に応じた分別と数量を チェックする。	*安全管理＝手袋必着 *健康管理 帽子、タオル *水分補給 (熱中症)	
	12:30 13:45 総1 総1	45 45	集計記録 写真撮影 漂着物アート作 品づくりのためのウキなどの水洗い	【美術】関連	

ウ. 「親子廃油石けんづくり」(総合3時間)

- ・各家庭から出る廃油をリサイクルし、石けんづくりを実施
- ・講師は母親委員に務めてもらい親子共同で製作

エ. 「島内公衆トイレ清掃作戦」池間島クリーンアップ作戦第三弾 (総合2時間)

- ・池間島内にある公衆トイレを5グループにわけ全校生徒で清掃
- ・観光客が多数訪れる池間大橋側のトイレや周辺清掃も行い、使
用心得などのポスターを掲示。



オ. 「池間大橋清掃大作戦」池間島クリーンアップ作戦第四弾 (特別活動4時間)

- ・島のシンボルともなっている池間大橋の清掃を行う。3月16日予定

(3) 事後指導

1学期の体験活動をもとに2学期は10月31日(日)に「環境(エコ)探求学習発表会」を実施。グループで環境問題に関するテーマを設定し、課題を追求していく中で体験活動と各教科・領域等で身に付けた知識や技能が相互の関連づけられた総合的な学習へと深化させる。

3 体験活動の実施体制

(1) 学校支援委員会の体制

- ① 地域環境教育推進委員会(P T A会長、整美部長、自治会長、子供会会長、漁協組合長、漁協婦人会長、老人クラブ会長、校長、教頭、研究主任、地域連携部)を組織し、530運動や島内クリーンアップ作戦等の環境T I M Eへ協力していただいている。
- ② 平良海上保安署、市の生活環境課、市栽培漁業センターとの協力し連携する。

(2) 配慮事項

- ・日本体育学校健康センターの傷害保険のほか市教育委員会の保険を活用する。
- ・危険が伴う体験活動における保護者、地域の方へは予め学校側で傷害保険加入をしている。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

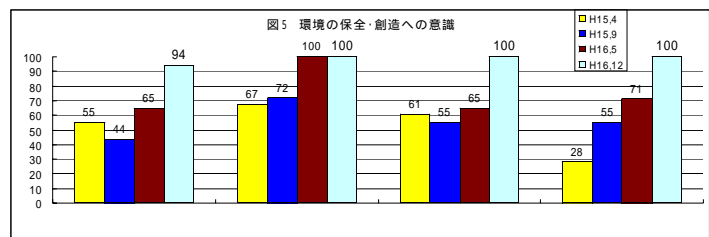
身につけたい力と観点別の具体的項目をのせた総合的な学習の時間の「個人支援カルテ」を活用し、支援教諭と各項目に関して自己評価やアドバイスを通して評価を行う。

5 活動の成果と課題

(1) 生徒のアンケート結果から

質問 次の各項目に、はい、いいえで答えなさい。→はいと答えた割合を%で表示

①自分は環境問題に関心が高い
②道路や海にゴミを捨てるのは許せない
③ゴミを分別して捨てている
④一人一人の努力で地球環境は救える



(2) 成果(変容)

- ① 総合的な学習を中心に教科、領域を網羅した学習と地域と密着した体験活動が結びつき、全項目で環境問題への意識が高まっている。最初のアンケート実施時には、生徒自身が空缶のポイ捨てをしたり、地域の不法投棄にも無関心であったが身近な問題としてとらえ、環境T I M Eでのボランティア清掃なども自分たちで企画し実践する等積極的にかかわるようになった。
- ② 座学から抜け出した体験活動において生徒が積極的になり、「環境(エコ)探求学習発表会」では各グループが創意・工夫を凝らし、地域住民への環境問題への提言を行うことができた。
- ③ 学校での環境問題の取り組みが地域に浸透し、地域住民の関心が高まった。

(3) 課題

- ① 環境T I M Eにおける体験活動事業の開拓。地域環境推進委員会の定期的開催の他、地域人材バンクの登録者を増やし、より充実した体験活動を推進する。
- ② 事前、事後の指導の他、評価等に要する時間の確保。
- ③ 2年次計画に向けて、教育課程への位置づけや教科への関連づけを充分練り上げた上で年間計画を作成する。

ボランティア活動を通して地域とふれあう体験活動

石川県立鶴来高等学校

学校の概要

① 学校規模

- 学級数： 14学級
- 生徒数： 490人
- 教職員数： 48人
- 活動の対象学年： 1年生175人
2年生120人

② 体験活動の観点などから見た学校環境

- 鶴来町は霊峰白山の麓、手取川扇状地の先端に位置し、手取川とその扇状地を挟む山々、日本海へと広がる加賀平野などがそれぞれの四季に彩りを呈する自然環境に恵まれた地域である。
- 舟岡山縄文遺跡や白山比咩神社に代表される古い歴史のある町で史跡も多い。農業や林業だけでなく古くから商業の町として栄え、金沢市とも接し、人口2万2千人を越える。手取川伏流水を利用して古くから醸造業が営まれ、また近年は先端技術産業の工場が進出している。
- 昨年学校創立60周年を迎えたが、創立当時から地域の学校として支えられ、また地域に貢献している卒業生も多い。

③ 連絡先

- 〒 920-2104
石川県石川郡鶴来町月橋町710番地
- 電話： 0761-92-0044
- FAX： 0761-93-5209
- ホームページ：
<http://www.ishikawa-c.ed.jp/~turugh/>
- 電子メール：
turugh01@mx.ishikawa-c.ed.jp

体験活動の概要

① 活動のねらい

- 地域の自然を愛する気持ちや社会奉仕の心や豊かな人間性・社会性を育む。
- ライフプランニング能力を育てる。また、調査や発表の活動を通して課題設定能力やコミュニケーション能力を養う。
- 生涯を通して健康やスポーツについて学習する態度の育成と地域スポーツに貢献できる人材の育成を目指す。
- 同じ地区の異年齢の児童生徒が音楽を通して交流し地域の伝統的な音楽に親しむ。

② 活動内容と教育課程上の位置付け

(単位時間数・日数)

- 自然に関わる体験活動
野外実習 (学校設定科目「スポーツⅡ」、11時間、2日)
- ボランティアに関わる体験活動
町内清掃ボランティア(LH、3時間)
福祉ボランティア
(総合的な学習の時間、7時間、1日)
中高国道157号クリーン作戦
(特別活動、2時間、1日)
- 就業に関わる体験活動
企業・大学見学体験
(総合的な学習の時間、7時間、1日)
就業体験学習
(総合的な学習の時間、8時間、2日)
- 文化や芸術に関わる体験活動
小中高音楽向上交流
(特別活動、3時間、1日)

1 活動に関する学校の全体計画

- 活動のねらい

ア 環境美化のボランティア活動を通して、地域の人々とふれあい、地域の自然を愛する気持ちや社会奉仕の心や豊かな人間性・社会性を育む。

イ 職場見学・体験や保育所や福祉施設でのボランティア体験、就業体験を通して、いろいろな人との交流し、職業観・勤労観を養い、早い時期に将来の職業人としての意識付けに努め、ライフプランニング能力を育てる。また、体験後も活動のまとめで資料を使ったり効果的な発表の工夫をすることによりコミュニケーション能力を養う。

ウ スポーツ科学コースにおいては、学校内ではできないスポーツに接することによって、生涯を通して健康やスポーツについて課題を見つけ探究する態度の育成、地域スポーツに貢献できる人材の育成を目指す。

エ 合唱や器楽演奏の発表をしたり聞いたりして音楽への感動を通し、同じ地区に過ごしながらも日頃接することが少ない異年齢、異校種の児童生徒と交流するきっかけとする。また、地元の人々が楽しむ伝統的な音楽に親しむ。

○ 全体の指導計画

体験の名称	学年等	活動内容	教育課程上の位置付け	期間等
町内清掃ボランティア	全学年	学期に一回町内の清掃活動を行う。 各学年又はホームごとに年間計画に入れ、主に通学路や駅舎の清掃を行う。	特別教育活動 ロングホームルーム	4時間 5月、10月、2月
手取川観月歩行 海岸清掃ボランティア	全学年	美川町の手取川の河口付近の海岸を清掃し、川岸を上流に向かい空き缶などを広いながら15キロのコースを満月を見ながら学校まで歩く。	特別教育活動 学校行事	8時間 1日 9月
小中高獅子吼グリーン& クリーン作戦 登山道の清掃と植樹	1年 小中高 合同の 活動	鶴来町のシンボルである獅子吼高原に登山しながらゴミや空き缶拾いをする。頂上では小中高校生が5、6名のグループを作り、ミズナラの植樹作業をする。	特別教育活動 学校行事	6時間 1日 10月
福祉ボランティアと発表会	1年	地域の老人福祉施設や病院や保育所を訪れ、老人介護体験や保育体験実習をする。	総合的な学習 の時間	7時間 1日 10月
企業・大学見学体験と 発表会	1年	卒業生が進学・就職している県内の主立った大学や企業を見学し、また「若者しごと情報館」で職業疑似体験や適性検査などを行う。	総合的な学習 の時間	7時間 1日 10月
小中高音楽向上交流事業 ブラスバンド・和太鼓等 発表会	1年 小中高 合同の 活動	小中高校生が合唱やブラスバンド、和太鼓など音楽を通して交流を深める。発表会においてその成果を披露し、また地域のプロの音楽家による演奏や講演を聴き、伝統音楽の面白さを学ぶ。	特別教育活動 学校行事	3時間 1日 11月
就業体験学習と発表会	2年	生徒が出身地域にある事業所を自分の興味関心や進路の希望に合わせて体験先を	総合的な学習 の時間	16時間 2日

		決定し、依頼から体験、お礼までを自分で行う。		7月
キャンプ実習	2年 スポーツ科 学コース	白峰村のキャンプ場にて、幕営、野外炊飯、登山、自然観察など野外実習を行う。	学校設定科目 「スポーツⅡ」	11時間 1泊2日 7月

2 活動の実際

① 国道157クリーン作戦

小中高獅子吼グリーン&クリーン作戦(登山道の清掃と植樹)に代わる活動として急遽企画することになった。

○ 事前指導

小中高合同の活動で町の教育委員会を中心に9月から計画や実施について5回の打合会や協議会が必要であった。特に後の2回は国道157クリーン作戦に変更後の打合会となった。

ホーム担任から地域に美しい環境を保つことボランティア精神を養うことの必要性、また小中学生とどう協力すればよいか、またリーダーとしての役割を考えた。

○ 活動の展開

11月5日に実施した。小学5年生62名、中学1年生100名、高校からは本校のスポーツ科学コースの1～3年生78名が参加した。11時の開会式では町教育委員会の担当者から、地球環境をよくするためゴミを減らすことから住み良い町作りにつなげることなどクリーン作戦の意義についての話があった。ゴミ集めの手順説明の後、小中高校生が7～9名のグループを作り、国道157号線沿いの森島町から安養寺町間の3.6キロの割当箇所へバスで移動し、清掃活動を展開した。グループの中の高校生1名がリーダーとなり作業について指示を行った。予定より30分遅く、午後1時に帰校した。



② 企業・大学見学、福祉ボランティア体験と発表会

○ 事前指導

直前指導も含め9月の総合的な学習の時間(以下「あじさいタイム」)で事前指導を行った。体験学習の趣旨や活動内容の説明、希望調査や班編成、訪問する企業、大学、施設の概要調べ、知りたいことや課題の設定などを指導した。また、体験実習ノートを配付し、心構え、服装や持ち物の確認、挨拶や礼儀について直前指導を行った。

○ 活動の展開

2日のうち1日を企業・大学見学、もう1日は福祉ボランティア体験にあてた。学年を2クラスと3クラスに分け、交互に体験した。クラス単位で企業体験を午前中に、次に昼食時間も含んで仕事情報館での職業疑似体験、午後には大学を訪問した。訪問した企業概要は合成繊維織物の製造販売業務、各種印刷物の加工製本業務、陶磁器洋食器やセラミック電子部品の製造業務、トラック・バスの部品製造業務、電気電量計の開発・製造の業務の5社であった。

福祉ボランティア体験では老人介護施設5カ所、病院2カ所、保育所・幼稚園は9カ所、1カ所の障害者更正施設に3名から14名の生徒が訪問し、午前9時から午後3時までそれぞれのボランティア活動を行った。

○ 事後指導

当日、帰校後に各自が体験記録を作成した。これは体験実習ノートの数ページにまとめる形式で、見学・体験先での活動日誌、感想、自己評価をまとめるものである。この記録をもとに11月中のあじさいタイムIにおいて発表原稿や資料をまとめ、ホームごとの発表、さらに代表による学年発表を行った。



3 体験活動の実施体制

○ 学校支援委員会の体制

ア 校内の推進委員会

校内の研究・推進委員会を組織し、学校としての推進体制を整備した。構成は教頭、総務課主任、教務課主任、特活科主任、「総合的な学習の時間」担当、総務課企画担当、スポーツ科学コース主任、1年学年主任の8名とした。

また、それぞれの体験活動の担当者や小中学校や町教育委員会との連絡・調整の部署として総務課に企画係をおいた。

イ 学校支援委員会

P T A会長を委員長とする支援体制を整備した。構成は校外より、本校P T A会長、学校評議員4名、鶴来町教育委員会学校教育担当者、鶴来町子育て支援課長の7名、校内より校長、教頭2名、総務課主任、総務課企画係、教務課主任の6名とした。

○ 配慮事項等

学外関係者の中には企業代表者や商工会事務局長が含まれ、地域の教育力を引き出す具体的な方策や地域にある教材や学習環境の積極的な活用について意見を求めたり、活動に具体的な支援をお願いしている。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

体験後の自己評価や実習ノートのまとめを活用する。あじさいタイムでは発表が学習活動の大きな部分を占め、課題設定能力、情報活用能力、コミュニケーション能力などを評価する。発表会では生徒や教師、学年全体発表では学校評議員や保護者に呼びかけて評価してもらう。

特別活動に位置付けた体験活動では生徒の感想やアンケートにより、内容についての評価するよう努めている。

5 活動の成果と課題

自然体験はさまざまな感動を呼び起こす良い機会を生徒達も楽しみにしていたのだが、天候や熊騒動のため海岸清掃ボランティアと手取川観月歩行と小中高獅子吼グリーン&クリーン作戦は実施に踏み切れず、縮小して「国道157号クリーン作戦」に代わることになった。小グループの中のリーダーとして役割を果たすことにより、責任感と自信をつけたし、地域の人と身近に接すること、地域の豊かな自然を再認識し慈しむ良い学習の場となった。

あじさいタイムでの企業・大学見学、福祉ボランティア体験や就業体験実習は事前・事後の学習にかなりウエイトを置いており、単なる活動に参加したという経験だけでなく、社会人としてのマナーや接し方、話し方、また発表の機会を得ることにより調べまとめる力、伝え聞く力が育った。

ボランティア活動として部や委員会での活動は取り組みやすく花いっぱい運動や清掃登山や福祉施設訪問など行っている。学年全体が関わるものは規模が大きなものに限られ、事前の準備に時間と手間がかかるので実施学年の年間予定を十分考慮する必要がある。

学習の深化と思いやりのある心を育ませる交流体験活動

長野県富士見高等学校

学校の概要

①学校規模

- 学級数： 12学級
- 生徒数： 405人
- 教職員数： 54人
- 活動の対象学年：主に3年生 33人

②体験活動の観点などからみた学校環境

- 山梨県境の長野県の東南に位置し、標高約1000mを中心とした自然豊かな地域である。
- 花卉・酪農・米等の農業地帯であるが、都心から高速道路で約2時間、JRで約1時間半ということもあり大企業も存在し、都内や他の場所から居を持つ人々が多くある。
- 学校に隣接して保育園や福祉施設、半径数百mのところの小・中・養護学校がある。
- 高校生は非農家出身者が多く、また、地域の子ども達は農家出身者もいるが農業体験をしている子どもは多くない。

③連絡先

- 〒399-0211
長野県富士見町富士見3330
- 電話：0266-62-2282
- FAX：0266-61-1001
- ホームページ：
www.nagano-c.ed.jp/fujimiko/
- 電子メール：fujimiko@nagano-c.ed.jp

体験活動の概要

①活動のねらい

- 他者に自らが体験し身につけたことを教えることで日頃の学習の深化を図り、さらに新しい自分の発見を目指す。
- 日頃と違った学習形態の中から生徒の個性を見だし伸ばす。
- 異年齢（特に年少者）と接することでコミュニケーションの力を育て、大切にすることを育てる。
- 同じ社会の形成者としての理解や受容する気持ち、障害者に対して正しい認識を持って接する態度を養う。

②活動内容と教育課程上の位置付け

- 小学生野菜・草花の栽培交流体験活動
科目「野菜」「草花」各14単位時間
- 保育園児栽培及び花壇づくり体験活動
科目「生物活用」8単位時間
- 養護学校生徒栽培菓子づくり体験活動
科目「総合実習」8単位時間
- 河川浄化活動
農業クラブ専門班活動 10時間以上
- 地域探索
1学年 10時間

1 活動に関する学校の全体計画

○活動のねらい

- ・交流においては、これまでの活動がまだ教師に依存するところがあったが、上級生の活動を見、定着してきたことから、対象の子ども達がよりわかりやすく楽しく参加できるように考え工夫するようになってきた。今年度は事前準備を充実させ、生徒がより主体的に活動できるようにする。
- ・河川浄化活動においては、過去の成果の継承でなく、他機関との連携を生かして化学的な検

証をし、取り組みの意義をより明確にしながら主体的に活動できるようにする。

○全体の指導計画

科目授業での活動においては、活動の実施より前に自らが学習していなくてはならない。したがって、当該学年の学習は当然であるが、1・2年での関連科目での学習においても活動について触れて、意識させるようにする。

学年	体験活動の種類・内容	期間・日数 単位時間数	教育課程 位置付け	活動場所	活動対象	指導者
3年	富士見小学校児童との交流 ・野菜や草花を通して土に触れ、育てることの大切さを知る。 ・小学校の花壇を一緒につくる。	5～11月 6日 14時間	科目授業	本校	ダイコン ニンジン シクラメン 他草花	科職員 小学校職員
3年	富士見保育園児との交流 ・園庭の花壇づくり交流 ・農場でのサツマイモの栽培交流焼きいも会	5～10月 4日 8時間	科目授業	富士見保育園 本校	花壇用草花 サツマイモ	科職員 保育士
3年	養護学校との交流 トウモロコシの栽培・収穫やクッキーづくりを通しての交流。	5～2月 4日 8時間	科目授業	諏訪養護学校	トウモロコシ 小麦	科職員 養護学校職員
23年	河川浄化活動木炭を製造して水質浄化とホテルの復活に取り組む	4～11月 4日 12時間	特別活動	富士見町内の河川	川の生物 河川	名取指 導員 科職員
1年	地域探索 富士見町の自然や文化について講話や校外での体験的学習	11～2月 2日 10時間	特別活動	本校町内	文化史跡 植物 山林	外部講師

2 活動の実際

(1) 小学生との野菜・草花の栽培学習交流

①事前指導

- ・前年度の活動の様子をビデオで観て雰囲気を感じる。
- ・授業（実習）で播種の方法や植え替えを行う際、どのようにしたら初めて経験する子ども達があわかってできるか考えさせ意識させる。秤の読み方など小学生の学習進度にも触れる。
- ・より主体的に活動できるように、楽しく興味を持って学習ができるようにするにはどうしたらよいか考えさせ準備をする。

②活動の展開

- ・活動場所：富士見高校園芸科農場
- ・生徒・児童の人数：生徒 野菜選択者17名、草花選択者16名。児童 小学3年生86名
- ・指導者：園芸科職員、富士見小学校3学年担任

	実施時期	時間	活 動 の 内 容
第1			◎野菜「ダイコンとニンジンの播種」 ①畑・交流の準備 ②はじめの会 ③生徒説明 ③高校生と小学生がグループになり高校生が指導しながら播種 ④終わりの会

2 回	7月中旬	各日とも 2時間	◎草花「シクラメンの鉢替え」 ①鉢替え・交流の準備 ②はじめの会 ③生徒説明 ④シクラメンの用土配合・鉢替えをグループに分かれて高校生が指導しながら行う。 ④終わりの会 ※野菜と草花の両方を体験できるように2回 実施。
3 4 回	9月中旬	各日とも 2時間	日程は第1回と同じ ◎野菜「ダイコンの収穫」ダイコンを収穫、用意した秤で重さを計る。 ◎草花「シクラメンの管理。枯葉取りと葉組み」 各自のシクラメンの枯葉を取ったりして管理。切り花の収穫。
第5 回	10月 下旬	2時間	前半は第1回と同じであるが途中で入れ替わって体験する ◎野菜「ニンジンの収穫」◎草花「シクラメンの仕上げ管理」 ◎後半は全体で「収穫祝」

③事後指導

- 各回の終了時に感想の発表や次回への工夫点を出す。全体が終了した時点で活動の振り返りをする。体験してみたの感想だけでなく、学習の深化はできたか、どう接することができたかや、体験を通して自分自身について新しい発見や成長した部分を考えさせる。



図：やりやすいようにしたり、目の高さに下がってあげられた

図：害虫さがし

小さな害虫だが小学生はすぐに発見する



(2) 河川浄化・ホタル復活への取り組み

①事前指導

- 木炭の製造について理論と実践を行う。 ・木炭の効用について学習する。
- 水質の指標生物について調べ学習を行い、水生生物による水質判断について学ぶ。
- ホタルの生態について調べ、ホタル復活にはどのような取り組みをすればよいか考える。

②活動の展開

農業クラブ専門班（環境保護会）の活動

回	実施日	時間	人数	活 動 内 容	指導
1 回	6月 中旬	2時 間	生徒16名 児童50名	・河川清掃 小学生と一緒に河川清掃を行う。 ・環境教室 小学生に対して河川浄化のミニ学習会。	園 芸 科 職 員
2 回	6月 下旬	2時 間	生徒16名 児童30名	・学校せせらぎ園の水質浄化 高校でつくった木炭を入れ替える。	
3 回	9月 中旬	2時 間	生徒16名	・木炭による河川浄化実験 製作した木炭を河川に沈め、水質浄化実験をすすめる。	
4 回	2月 下旬	2時 間	生徒16名	・ホタル復活への取り組み(1) ホタルの生態について、ホタル研究家を招き学習会。	指 導 員
5 回	3月 下旬	2時 間	生徒 8名	・ホタル復活への取り組み(2) 越冬状況を現場で指導を受け生息の実態を調査する。	員



図 生徒が先生になって説明

図 心を合わせてゴミ拾い

図 せせらぎ園の炭の交換

③事後指導

- ・河川について小学生がどのようなことに興味を持ったか考え、今後の環境保護活動の普及について検討した。
- ・木炭による河川浄化について校外で発表したところ、信州大学名誉教授より河川の水質調査についてアドバイスをいただき、連携することになった。

3 体験活動の実施体制

○学校支援委員会の体制

教頭・農場主任を中心に園芸科職員で推進。各学校との連携がしやすいように教頭や園長に支援していただいている。

○配慮事項等

農場での安全確保は、担当職員が全体の動きに注意を払い、各活動の安全については各担当生徒が配慮するよう事前指導。特に7月実施については、圃場の水道が井水であるため注意した。

富士見町 教育委員会	教育長
富士見小学校	教 頭
諏訪養護学校	教 頭
ホタル研究家	町役員
富士見保育園	園 長

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

- ・自己評価や感想、自分自身への気づきや発見をまとめた。活動時は、回を重ねることで取り組みの姿勢や指導の工夫が見られるか、どんな声かけができていているかを中心に観察した。
- ・活動終了時に反省と次回の展開について話し合った。

5 活動の成果と課題

○活動の成果

- ・日頃の学習や事前準備が前向きに取り組めるようになり、活動の中で臨機応変に対応する力もついてきた。また、自分たちが教えることはものの栽培だけでなく、準備や片づけもあることに気づき、自分たちの活動を振り返ることができるようになったりした。
- ・一緒に活動する中で、理解できる言葉の違いを感じ、言葉かけの工夫をする姿が見られたり、年少者のためか緊張することなく積極的にできるようになり、主体性が見られた。
- ・クラスでの様子やこれまでの学習活動の中では見られない生徒の表情や行動が見られた。
- ・実践的な活動が活かされ、子どもたちに臆することなく活動ができていた。一人ひとり関わり方に違いはあるが、どの生徒も優しく声かけができ、よく話が聞けていた。
- ・環境に対して子どもたちに説明したり活動に係わる中で、さらに環境問題に興味を持ち、その後の取り組みが積極的になっていった。

○課題

- ・個々に関わるときの取り組みに比べて、そうでないときは代表者に任せきりという姿勢が見られた。全体でどのように関われるか考えなくてはならない。
- ・具体的、計画的な評価方法をさらに工夫し、指導改善に役立てる。

【高等学校・農業体験に関わる体験活動】

「農業をとおして心豊かに」体験活動

高知県立幡多農業高等学校

学 校 の 概 要

①学校規模

- 学級数：12学級
- 生徒数：424人
- 教職員数：44人
- 活動の対象学年：1年生・149人

②体験活動の観点などからみた学校環境

学校のある中村市は県西部に位置し、人口約3万人、昔から自然豊かな地域で、第一次産業を中心に栄えてきた。特に緑豊かな山や清流四万十川、そして黒潮流れる太平洋が身近にあり、本来自然と触れあう様々な体験の機会を多くもてる地域であるが、近年、子どもたちは日々の生活に追われ体験の機会が少なくなっている。

③連絡先

- 〒787-0010
高知県中村市古津賀3711
- 電話：0880-34-2166
- FAX：0880-35-6335
- ホームページ：//www.kochinet.ed.jp/hatanogyo-h/
- 電子メール：hatanogyo-h@kochinet.ed.jp

体 験 活 動 の 概 要

①活動のねらい

本校の施設を活用し、高校生が地域の小中学校の児童・生徒の体験学習の指導や支援を行いながら交流を深め、豊かな人間性を育む。

また、非農家出身の生徒が増加しているなかで、専門高校の学科の特色を生かし、学科の枠にとらわれない体験を通して、農業高校に学ぶ意義を考える。そして、学習意欲の向上や将来の進路選択に役立たせ、卒業後の生活が充実するような取り組みを行う。特に平素の学校生活や学習では学ぶことのできない体験に積極的に取り組む。

②活動内容と教育課程上の位置付け

農業体験活動

「総合実習Ⅱ」	2単位	}	40時間
「農業科学基礎」	2単位		
「環境科学基礎」	2単位		

社会体験活動

「総合実習Ⅱ」	2単位	}	14時間
「学校行事」			

校種を越えた交流活動

「総合実習Ⅱ」	2単位	12時間
---------	-----	------

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

非農家出身の在學生が多くなり、農業高校で学ぶ意義やその魅力について第1学年で学ぶことは非常に重要である。そこで学科や教科にとらわれることなく生徒が興味関心を持って取り組むことができ、また継続的な内容とすることで、日々の高校生活が充実できるようにした。

- ①動植物の飼育・栽培を通して広く人間教育を行う。
- ②農業高校ならではの体験学習を学科を超えて行い、農業の魅力について学ぶ。
- ③地域の小中学校の体験学習を支援したり、生産物対面販売を通して地域との交流を図ったりすることで、農業高校で学ぶ楽しさを感じる。
- ④活動は継続的内容とし、参加生徒が達成感を感じることでできる体験とするなど、体験するなかで「生きる力」を育むことを目標とした。

(2) 全体の指導計画

ア 農業体験活動

第1学年で学習する「農業科学基礎」「環境科学基礎」の学習内容にあわせて体験することで、初めて学ぶ専門教科の学習に対する興味関心を育てる。

①搾乳体験・・・「総合実習Ⅱ」2単位（6時間）

放課後、当番で飼育する乳牛の搾乳を行い、「食」や「命」についても考える。

②野菜の作付け・管理・収穫・・・「農業科学基礎」2単位（18時間）

作物の栽培から加工、試食までの一連の体験を通して、達成感を得る。

（スイカの担当栽培、白菜の担当栽培と白菜の漬け物、大豆の栽培と豆腐の製造）

③葉ボタンの栽培・・・「農業科学基礎」2単位（16時間）

全員が一鉢ホームプロジェクトとして、家庭で家族と協力して葉ボタンを栽培し、文化祭で品評会を実施し、育てる喜びを体験する。

イ 社会体験活動

学校外での体験や一般の方々との交流を通して、農業の魅力を感じ、日々の学習の必要性を考える。

①見学・実習体験・・・「総合実習Ⅱ」2単位（6時間）

各科の学習内容に合った見学や実習体験を通して、日々の学習を充実させる。

（契約栽培トマト温室の企業等・乳牛共進会・牧場等・木工所や菌床栽培施設等福祉施設等）

②販売体験（はたのう市場）・・・「学校行事」（8時間）

授業で生産した生産物を一般来校者に対面販売することで、達成感や充実感を得、次の学習意欲につなげる。

ウ 校種を超えた交流活動・・・「総合実習Ⅱ」2単位（12時間）

①小中学生との交流（ボランティア活動）

小中学生の体験学習の指導を高校生が行うことで「農業」や学校の理解を高める。

具体的内容：搾乳体験・田植え・甘藷栽培・バター作り・家畜の世話・豆腐作り
巣箱作り・宿泊研修・シイタケ作り・環境学習・竹細工・木工細工等

②大学生との交流

本校出身の大学生の授業や講演などにより、充実した高校生活を送るための長期計画をたて、ライフプラン作成の参考にする。

2 活動の実際

計画すべてがまだ完了していないが、次の点に留意し実施した。

(1) 事前指導

該当する事業で、その目的や目標など十分理解した後に体験するように指導した。

例1：小学校との交流

予測される質問等について学習し、小学生の質問に十分対応できるようにした。また対象学年に応じた説明ができるように、言葉や表現も工夫した。

例2：販売体験

販売物の詳しい説明ができるように、その品種や作付け方法、加工方法など販売物について詳しく学習した。また対面販売ということで、言葉遣い等の対人マナーにつ

いても学習を深めるとともに、金銭を扱うことの責任の重要性を理解させた。

(2) 活動の展開

例1：スイカの作付け

入学後すぐにスイカの担当栽培を実施した。担当者がわかるように工夫したり、観察日記を準備し、日毎に成長する作物に接して自然や農作物の営みを肌で感じる体験を目指した。



(農産物の販売体験：はたのう市場にて)

例2：葉ボタンの品評会

苗を各家庭に持って帰り、約2ヶ月間家庭で育てた。その結果、家族全員で協力した生徒もいたが、ほとんど世話をせず成長があまりみられないものもあった。

11月の文化祭に全てを回収し、株の大きさによる品評会を実施した。



(葉ボタンの品評会：幡多農祭にて)

(3) 事後指導

例1：野菜等の担当栽培

スイカの栽培では、各自に栽培歴を渡し受粉など重要な部分を任せましたが、積極的に取り組んだ生徒と、そうでない生徒では、収穫の差となって顕著に現れた。

これらをもとに3年間農業高校で学ぶうえで重要な動植物に接する姿勢や学習の取り組み方を指導した。



(スイカの収穫：荷造り作業)

例2：搾乳体験

飼育する乳牛の搾乳体験だけにとどまらず、牛乳の温かさから命の尊さを考える指導をした。試飲を通して食の安全や、食物生産の大変さ等も指導した。

3 体験活動の実施体制

基本的には校内に新たな組織を作らず、既存の学科主任会が中心になり計画を作成した。そして、専門教科の全教職員が指導にあたることとした。また、支援委員会は、保護者や地域の方々にも参加していただき、広く意見を出していただく体制で設置した。

4 体験活動の評価

全ての体験活動において、対応する科目での評価を実施している。その内容は、事前指導で提示した事柄を十分に理解し実行できたか、また感じる事ができたか。そして本事業の大きな目標である、農業高校生として農業に対する興味関心が持てるようになったかを、生徒の感想文などで評価するようにしている。

○実施上の工夫

体験そのものにとらわれ、単に「楽しい」で終わることなく、その体験の基にあるもの、あ

るいは先にあるものを考えることができるように指導方法や内容を工夫した。

参考：畜産関係の体験では

- ・乳房内で真っ赤な血液から真っ白な牛乳ができることを例にし、動物の体の機能のすばらしさを学ぶことから、人間の体の健康について学習するように工夫した。
- ・豚では乳頭の数以上の子豚は、兄弟であっても生存競争のため育たないことを例にして、人間の持つ「他人を思いやることのできる心」の素晴らしさを考えさせた。
- ・畜舎での体験時必ず出る「臭い」という何気ない言葉から、「飼育者や家畜の気持ちになった場合を考えてみよう。」と問いかけ、人権について考えさせた。

参考：宿泊体験の受け入れでは

本校では年間、延べ30校以上の小中学校の体験学習を受け入れ、1,500名以上の参加者がある。これらの実施にあたり高校生も「総合実習」などで様々な協力をした。

- ・本校の宿泊施設を使つての宿泊体験では、生活コーディネート科の生徒が食事などの準備をしたが、日ごろの調理実習と違い、参加者に喜んで食べてもらえることから、授業以上に熱心に取り組むなど、ボランティアについても認識が深まった。
- ・来校時高校生が玄関や駅まで迎えに行き、班別で小学生を担当するなど、個別の関わりを持つ工夫をした。その結果、小学生との手紙のやりとり等の交流が深まるなど、様々な波及効果もあった。

参考：農業を通した「食育」の積極的な導入

積極的に「食育」に取り組んだ。これはただ単に体験するのではなく、参加者の理解や興味関心を高めることを目的とし、身近な「食」と関連付けた学習内容にした。

例：搾乳した牛乳の試飲やソフトクリームを試食。大豆の作付けと豆腐やおからの試食。稲作と新米の試食。苗から育て収穫したサツマイモの調理及び試食。等

5 体験活動の成果と課題

ア 成果

生徒の感想から、自然の中で起こる様々な事象や動植物の生命に触れることは教材として有効であると考えられる。また、地域において様々な体験をする機会が少なくなった現在、農業を通して「食」に関わりながら体験することは素晴らしい学習であることが理解できた。特に、本校の生徒をはじめ小中学生にとって搾乳体験は最も驚きや感動があったようだ。また、搾りたての牛乳の温かさはまさに生きた教材で、その牛乳を使ってバターを作りパンに塗って食べるとその味は格別であり、達成感や充実感を味わい、生徒の心にしっかりと刻まれ、牛乳が飲めなかった生徒が飲めるようになったなどの成果もあった。

今回様々な活動を通して、「体験」の重要性を再認識できた。生徒が実際に「見て」「触れて」「感じた」ことは、机上の学習以上に、生徒の心にしっかりと刻み込まれていると思われる。

イ 課題

事前指導が十分でない場合、取り組む姿勢が不十分であったり、ただ単に「楽しい」で終わってしまったりすることがあった。最終的な目標は生徒の「生きる力」を育むことであり、そのためには十分な準備と計画が必要で、教員主導型から生徒主導型となるような取り組みが重要である。そして、生徒の感想に対して個別にアドバイスなどを与える等の一歩踏み込んだ指導が必要であり、来年度に向けての課題である。

嘉穂中央ふれあい体験交流事業

福岡県立嘉穂中央高等学校

学校の概要

- ① 学校規模
 - 学級数：13学級
 - 生徒数：496人
 - 職員数：63人
 - 活動の対象学年：1年生160名
3年生 32名
- ② 体験活動の観点などからみた学校環境
 - 人口82,000人の商業を中心産業とした市にある。最近、JR篠栗線の電化、バイパスの開通で宅地化が進みつつある。
 - 周辺には自然が多く残り、祭など伝統行事なども受け継がれているが、学校の調査では、徐々に生徒の参加が減少している。
 - 最近、様々な自然体験が見直され市全体で地域づくりや教育の在り方を見直し、協力しようとする雰囲気が高まりつつある。
- ③ 連絡先
 - 〒820-0014
福岡県飯塚市大字鶴三緒1518
 - 電話：0948-22-0412
 - FAX：0948-23-8804
 - ホームページ：<http://kahochuo.fku.ed.jp/>
 - 電子メール：info@kahochuo.fku.ed.jp

体験活動の概要

- ① 活動のねらい
 - ボランティア活動で学んだ他者との共生及び環境美化の精神を、日常生活にかそとうとする態度を身に付ける。さらに生命の尊さについて理解させる。
 - 日頃の学習成果を発表する場として、小学生への野菜栽培指導を行い、生徒の学習意欲の向上を図る。
 - 地域の幼稚園・保育園児、小学生、中学生との交流を通して人間性や社会性を育む。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け
(単位時間数・日数)
 - 交流体験活動
 - 「総合実習」 22単位時間
 - 「課題研究」 23単位時間
 - ボランティア体験活動
 - 「総合的な学習の時間」 8単位時間

1 体験活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

ボランティア体験活動では、中学校・高等学校の生徒が草花植栽・除草の共同作業を行うことにより、生徒の交流を促進し、植物栽培を通して生命の尊さについて学習する。さらに、地域住民と共同で地域の環境美化に貢献することによって、生徒のセルフイメージと地域愛の高揚を図る。交流体験活動では、野菜栽培、収穫体験を本校の授業内容と連動させ、異校種間交流を通して日頃の学習成果を発表する場として位置付ける。また、教師の補助を最小限にし、生徒の自主性を重視して学習意欲の向上と、人に頼らず相手の気持ちを理解して物事に適切に対処できる能力を養う。

上記の異校種間の体験活動全般を通して、心豊かな人間の育成を図る。

(2) 全体の指導計画

ア 活動の名称

嘉穂中央高校ふれあい体験交流事業

イ 実施学年

- ・第1学年 160名
- ・農業技術科3年 32名

ウ 活動内容

- ・小学生への夏野菜・秋野菜及びイネ栽培指導
- ・保育園・幼稚園児・小学生との交流活動
- ・中学生との合同によるボランティア交流活動

エ 教育課程上の位置付け

- ・野菜・イネ栽培指導 ……「総合実習」
- ・交流活動 ……「課題研究」
- ・ボランティア交流活動 ……「総合的な学習の時間」

オ 具体的活動計画

(ア) 小学生への夏野菜・秋野菜及びイネ栽培指導

- ・活動時間 「総合実習」
- ・対象 小学2・5年生
- ・活動計画 (合計配当時間：22時間)

月	活動内容	配当時間	場所
5	夏野菜栽培(種まき、定植、支柱立て)	4時間	稲築西小学校
6	サツマイモ栽培(苗植え) イネ栽培(田植え)	2時間 2時間	嘉穂中央高校 〃
7	夏野菜栽培(誘引、収穫)	2時間	稲築西小学校
9	秋野菜栽培(種まき)	2時間	稲築西小学校
10	秋野菜栽培(除草・中耕・追肥・間引き) サツマイモ栽培(収穫)、体験(ポニー乗馬) イネ栽培(稲刈り)	2時間 4時間 2時間	稲築西小学校 嘉穂中央高校 〃
12	秋野菜栽培(収穫・ちゃんこ料理)	2時間	嘉穂中央高校

(イ) 交流活動

- ・活動時間 「課題研究」
- ・対象 幼稚園・保育園児
- ・活動計画 (合計配当時間：23時間)

月	活動内容	配当時間	場所
5	畑作り	2時間	近大幼稚園
6	サツマイモ苗植え ジャガイモ掘り 農場見学 サツマイモ苗植え	2時間 2時間 1時間 2時間	近大幼稚園 嘉穂中央高校 嘉穂中央高校 嘉穂中央高校
7	保育園訪問	2時間	常葉保育園
10	サツマイモ掘り	6時間	嘉穂中央高校
11	サツマイモ掘り	2時間	嘉穂中央高校
12	保育園訪問	2時間	常葉保育園
12	幼稚園訪問	2時間	近大幼稚園

(ウ) ボランティア交流活動

- ・活動時間 「総合的な学習の時間」
- ・対象 中学1年生
- ・活動計画 (合計担当時間：8時間)

月	活動内容	担当時間	場所
1 2	草花栽培 (事前指導)	1時間	嘉徳中央高校 飯塚中の島
	草花栽培 (定植、品種：ポピー)	3時間	
3	花壇管理 (事前指導)	1時間	嘉徳中央高校 飯塚中の島
	花壇管理 (中耕・除草・追肥)	3時間	

2 活動の実際

(1) 事前指導

小学生への野菜・イネ栽培指導では、生徒は2年次に実際に栽培しているため、再度、各野菜・イネの栽培方法をプリント等で復習し、栽培の要点や栽培指導計画について具体的に説明を行った。また野菜栽培指導では、指導の全般をすべて生徒自身の活動とし、教師は指導には入らないことを伝えた。教師を頼らず、生徒各人の自主性と日頃の学習成果を発揮する場として、生徒たちが自ら工夫しながら栽培指導を行うことを確認した。

幼稚園・保育園児との交流体験活動では、生徒たちに年間の交流計画を立てさせ、必要な事前準備の計画を入念に行った。さらに、学校内の施設・農場の紹介ができるように農場配置図を作成した。

中学生とのボランティア交流活動では、ポピー栽培の目的・方法、現地への経路、注意事項、中学生との交流の目的、さらには活動場所である公園の歴史についての事前指導を徹底した。

(2) 活動の展開

年度当初(4月)に保育園・幼稚園、小学校及び中学校の担任団と実施の大まかな年間計画を作成し、交流活動に必要な準備等の確認を行った。実施直前には、事前準備、交流内容及び作業内容等の細かい打ち合わせを行い、特に、屋外で行う野菜栽培やイネ栽培では、実施に向けて天候が大きく左右するため、当日まで連絡を取り合って実施の判断をした。



小学校での野菜栽培指導



幼稚園・保育園児との交流



中学生とのボランティア交流

(3) 事後指導

交流体験活動後、感想文を提出させ、生徒が様々な体験をどう受けとめ、どう感じたか把握した。今後、より良い体験活動をしていくために、実施の目的と生徒の思いが重なっているかを把握し、次回の実施に向けて工夫・改善することとした。

また、保育園・幼稚園児、小学生、中学生から頂いたお礼の手紙等を生徒に紹介し、交流活動の必要性とその効果を生徒に再認識させた。

3 体験活動の実施体制

(1) 学校支援委員会の体制

本校では、平成10年度から様々な体験活動を積極的に行っており、その反省から、本年度の研究目標の一つを校内推進体制の確立とし、全職員が様々な体験活動に協力できる体制づくりを行った。その結果、これまでの一部職員による体験活動の実施体制は大幅に改善された。具体的には企画委員の学科主任・学年主任を中心に据えて実施計画案を作成し、学科や学年を主体にした体験活動を実施することができた。

また、PTA会長、同窓会長、市役所都市計画課長の三者に依頼して学校支援委員会を構成し、活動計画時に関係各方面への協力助言や、実際に外部講師として参加し、指導していただいた。

(2) 留意事項等

交流体験では、比較的移動が容易な距離にある高等学校周辺の幼稚園、保育園、小学校、中学校と連携した。特に、小学校との野菜栽培交流体験活動では小学校内に畑があり、栽培全般を通して、小学生が管理できることを条件として連携を行った。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

実施後、実習日誌の提出と感想文を提出させ、最後に1年間のまとめを行って、自己採点させた。特に今回、本校の授業内容と連動させ、日頃の学習成果を試す場として捉え、交流時は可能な限り生徒の自主性に任せ、教員の指導助言を極力控えた。

5 活動の成果と課題

(1) 成果

交流体験終了後の感想文では、生徒は学校で学んだ専門知識や技術をどうやって相手に教えるか、またどうやったら理解してもらえるかなどの「教える難しさ」と「交流の大切さ」を学んだ。しかし、自分たちで悩み、工夫しながらコミュニケーションを図っていく中で「笑顔の大切さ」を知り、「協力しながら作業する必要性・楽しさ」を実感し、それを実行して成し得た「達成感」や「充実感」は生徒にとって、貴重な財産になったと考えられる。

また、野菜栽培指導のなかで、おもしろ半分には苗をひっぱっている児童に「そんなことをしたら、苗が枯れてしまうよ。野菜の苗も生きているから、枯れるということは死ぬということだよ」と説明している姿を見て、生命の尊さについての指導が自然に行われており、野菜栽培を通じた交流体験活動の重要性を再認識した。

(2) 課題

ア 体験活動が天候に左右される

本校が実施している体験活動は屋外（農場）で実施する場合はほとんどで、雨が降れば延期または中止せざるを得ない。特に小学校や中学校との交流では延期した場合の日程調整が非常に難しい。また、栽培作物も作業の適期があり、実施日がずれると作物の生長に影響を及ぼすので、当日の朝まで実施の判断を延ばすなど対応に苦慮した。

イ 交流体験の実施時数

専門高校の教育目標の一つに、「将来のスペシャリストとして必要な基礎的・基本的な知識と技術の習得」があり、基礎・基本の上に様々な専門知識を習得するという目標がある。その中で、体験活動を通して交流を行うことは教育的に意義深い。さらに専門深化をするためには、専門的な学習の時間を確保しつつ、交流活動の時間を充実させていく必要がある。そのために、学校の教育活動全体の視点から交流体験活動の実施時間数について考えていきたい。